

# 岩見沢の民話



岩見沢民話は、平成9年2月21日に「いわみざわの民話」刊行委員会が刊行されたものを再掲いたしました。

「いわみざわの民話」に若干の校正と参考資料等を追記しています。

ぎよくせんえん

## 玉泉園物語

今の中央通りは、子どももの

ころ夕張通りと呼ばれていた。

この夕張通りについてはこんな

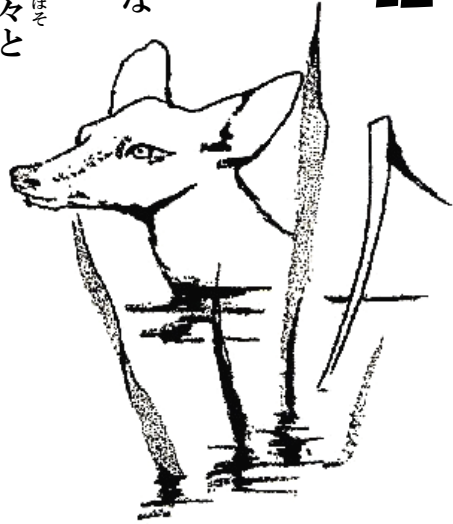
ことが語られている。その昔、

ここは鹿道といって鹿の通る細々と

した道であった。その鹿道をどこまでも歩いて行くと、着いたところが夕張だったという。それで夕張通りという名がついたわけである。

今はマチの中の中央通りとして栄え、そのはずれからの山道は、まだいくらか夕張通りの面影を留めているといえるだろうか。その入り口のあたりに玉泉園がある。昔はこのあたりの山間にかけて、キジやハトや鹿がいた。みんな平和な暮らしをしていたようだ。

いつかアイヌが住みつくようになり、狩猟好きなアイヌのえじきになることが多かった。そのために射たれて傷つく動物が多く、神さまはこのことを悲しまれ、それらを癒やしてくれるわき水を与えてくれた。このわき水は鉱泉で、これをわかして静養の場所としているのが今の玉泉園である。



ある日のことであつた。よたよたと傷ついた一頭の鹿がこのわき水のあたりにやってきて、二三日ばかりはほとんどここで過していった。

鹿は傷ついた体を水にひたして自らをじつくりと癒やしているのだつた。一人の若いアイヌが、この鹿の後をつけて丈高い笹むらからその様子をのぞいてしまった。数日もすると、この鹿はもうまったく元氣になつたらしく、勢いよく立ち上がつて笹むらをかきわけるようにして去つてしまい再びそこに姿を見せることはなかつた。

若いアイヌはこのことを大人たちに話して歩いた。アイヌはその不思議な水を訪ねて、それがただの水ではないことを知り、傷ついた時や疲れた時に、ひそかにその水がどんなに役立つかを試してみた。

神さまの恵みは与えられた。アイヌに新しい知恵が生まれた。これをのがすことはできない。そう思った。ところがこのことはここを通る旅人の目にも留まり、不思議な水はすぐに人々の心をひいた。経験ゆたかな旅人は、それがどんな水か、それがどんなことに役立つかを直感した。こうしてわき水は次第にささやきを大きくしていった。



やがて旅人によってわかされるようになった。つまり温泉として使われるようになったのである。不思議なわき水は温泉に変わり、わかすことよつて一層の効用を高めた。キジやハトや鹿のための神様の水は、人間よつてたくみに利用されることにより、そこには誰がこしらえたのか旅人のための仮の宿泊小屋もでき、ゆつくりとその旅情を慰めることも可能になったのである。それからまた年月が流れ、時は惜しみなく人間の世界を、そして、その環境を変えていった。玉泉園はそうした現在の顔である。

### 《参考》

- ・ 玉泉園は明治三十七年(一九〇三年)創業の温泉旅館『玉泉館』の庭園として親しまれてきたが、昭和五十四年(一九七九年)、玉泉館の廃業とともに公園も廃止した。

- ・ 平成十三年(二〇〇一年)、市民からの要望を受けて、玉泉園は日本庭園風の公園『玉泉館跡地公園』として復元し、現在は市民の憩いの場として、多くの人々から愛され親しまれている。



玉泉館跡地公園

## くまう 熊射ち物語

札幌、幌内間の鉄道が開通し岩見沢にも駅ができた。そうして近代文明のさきがけ『義経号』などが近くを通るようになって、熊は人家の近くまでやってきた。

ある夜などは、おおいのな窓穴から熊がのつそりとのぞきこんでいることがあつて、ドギモをぬかれたという話がある。

当時、熊射ちの名人といわれるハヤトがいて熊をよく仕止めた。なかでもハナコという子連れの熊がいて、

これがなかなかのつわものなので、ハヤトの心臓は高鳴りしていた。

しかしハヤトは、とうとうこの熊を突きとめて一発で見事に射ち抜いた。そんなことで参るような奴ではないので、二発、三発と射ち込んだのだが、それでもものがれのがれて川のふちまでやってきた。

これが幾春別川で、そのころは川幅も広く水もまた青味をおびていた。川ぶちまでやってきた熊のハナコは、そこでざぶんと水中に飛び



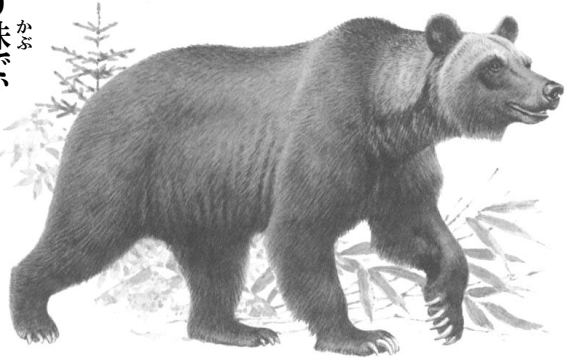
込み流れに逆らってようやく向こう岸に着くには着いたが、ここで最後の一発を食らってしまった。ハナコはハヤトに射止められた。

ハナコはどぶんと水しぶきをあげて水中に引き込まれ、そのまま流されていった。そのため幾春別川は見る見る鮮血に染まり、一瞬赤い花びらが開くように見えたという。母親を失った二匹の子熊、タロウとジロウは親の因果で、これもハナコのようになつてはと無残にもとらえられて殺されてしまった。

住民たちは罪のない子を殺した供養にと、アカダモの大木の幹をけずり、そこに、『ハナコの子タロウ、ジ

ロウの墓』と書いた。すっかりひらけ切った現在は、それが単に語り草として残っているだけで、どのあたりであつたか知る由もない。ただ熊射ちの名人といわれたハヤトが、後年は体力も衰えて余り熊を追い回すこともできず、待ち構えて射止めたという熊の木が近年まであつたという。

それは十メートルばかりの大樹の切り株で、ハヤトはこの上で熊の歩みよるのをじっと見ていたというのである。



## わた ぼ 渡し場物語

川ひとつはさんで向かいは栗沢、こちらは岩見沢である。今は立派な上幌橋がかかり岩見沢側は上志文町となっている。

上志文町も昔と今とではずいぶん変わっているようだが、この橋のあたりは、すなわち渡し場といった所である。当時はかなり栄えた所らしく、そこが人の出入りのはげしい宿場となっていた。舟はアイヌの使った丸木舟ではなく、ちゃんとした

手のこんだ舟だつたというから、このあたりにはちよつとした舟大工もいたのだらう。

人の出入りの多いここは今でいう

繁華街とも名づけるべきところで、

宿屋はもちろんのこと料理屋もあり客引きもいた

らしい。店といえば一応そろつていたらしく、オケヤ、トウフヤ、ブリキヤ、テイテツヤ、トコヤ、カジヤ、それに五厘パンヤもあつたという。

なかなか色々なものがそろつていて、珍しいことではヨーカンを売るヨーカンババア、テンプラを売るテンプラババアなどもいたといわれて



いる。それに神社、お寺、駐在所ちゆうざいじよもあり芝居小屋しばいこやもあったというからひととおり町の形態けいたたをなしていたといえるだろう。

しかもここは山間やまあいに万字炭鋳まんじたんこうをもっていたし、当時は原木げんぼくもかなり出ていたというから、なかなかのぎわいをなしていたのだろう。

ともかく岩見沢いわみざわに出るのにも夕張ゆづりに行くのにも、どうしても通らねばならぬところであり、それを横切るようにして山間やまあいの万字炭鋳まんじたんこうもあるということから、いわばここが十字路じゅうじろというところでもあった。

そんなわけで、さまざまな人種じんしゆが集まってかなり物騒ぶつそうな町であったともいわれている。ずいぶん悪い奴やつも来たし、あらくれ者くれものも来たらしい。だから駐在所ちゆうざいじよの巡査じゆんさなどではおさまりのつかぬ事件じけんがたくさんあったようだ。こうした一種いっしゆの無法地帯むぼうちたいにはかならずそれなりの用心棒ようじんぼうが居つくものであった。

そのころ名の知れた用心棒しんぱんといえは、目玉の松ちゃん、般若はんにやの松とかいったヤクザであったが、それほどたいした大物ではなく、今も住民じゆんみんの中に忘れられぬ人として藤五郎とうごろうあにいたというのがいた。藤五郎は役者やくしゃのようないい男おとこで、きつぷもよく、その上若いのに似合にあわず貫禄かんろくがあったといわれている。藤五郎はバクチもしたし人を泣なかせるような悪さあくさもしたが、頼たのまれればいやといわず殊ことに女にや子どもには人気にんきがあった。藤五郎の男らしさが好このかれたのだろう。

この宿場にはいつも何かのいざこざがあった。さきにも言ったが駐在

所の巡査じゆんさなどでかたづくものではなかった。そんなときは藤五郎が起用きようされた。藤五郎が出て行くとそれはかんたんにおさまった。

泣なく子どもだまるということわざである。藤五郎の家の近くの料理屋りょうりやには藤五郎もときどきあがった。そこには女にがいた。そうした女にの中には宿命しゆくめいを背負せおった若い子こもいたらしい。どうしたことか藤五郎はおシズにひかれおたがい熱あつい仲なかつになってしまった。しかし藤五郎には女房にようぼうがいた。男らしい藤五郎には分別ぶんべつがあった。きつぱりと別わかれることにした。藤五郎は料理屋りょうりやの主人しゆじんにだまってカネを渡した。

おシズを夕張ゆづりにやることにしたのだった。

藤五郎はおシズには旅人りよびの連れをつかせ、知り合いへの手紙てがみを持たせ旅費りよひも与えてこっそり夜の川を渡らせた。

上幌橋じやうぼうしを渡ると橋はしのたもとにちよつとした大石おおいしがある。ひっそりと送られたおシズは、その大石の上うへにのびあがつて何度も藤五郎に無言むごんのお辞儀じぎをしたという。それが藤五郎の目にはほのかに映うつったということである。



# 雨読橋物語

駅前通りを教育大学に向かって走る道路が農業高校の終わるあたり、スポーツセンター入り口近くに今は近代的な橋となった雨読橋がある。雨読といえぼすぐ思い出される晴耕雨読という言葉がある。

晴れて耕し降つて書を読む実学のことである。その通りこの橋に近い学園農業高校は、昔から実学をモットーにする汗して学ぶ学校であつた。多分そんなところから

付近の住民は、この橋を雨読

橋と呼ぶようになったともいわれている。それはあたらすといえども

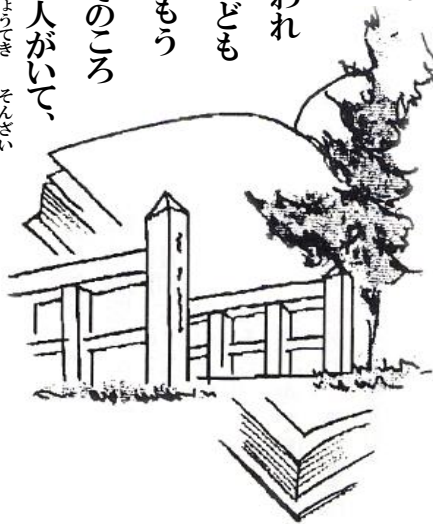
遠いことではないだろう。ただもう

少しこれを手繰つて行くと、そのころ

学園には雨読先生と呼ばれる人がいて、

ある意味では、この学園の象徴的な存在であつたともいわれている。

この先生はつねに晴耕雨読の実学精神を説いてゆづらなかつたともいわれている。おそらく漢学の先生ではなかつたかと思われるが、あまり上席ではないようだったが、職員間では皆一目おいたところが



あつた。その風態は古風でがんで超然としていて、しかも善意とい

ささかのユーモアすら感じられるところがあつた。そんなところから雨読先生の愛称はとび出したのであろうが、この先生の本名をいう

者は一人もなく、従つて本名は何とのかさえ知つてはいなかつたようである。これはだいぶん後の話になるが、中年の卒業生たちがク

ラス会を開くために、今ではその所在さえ知れない雨読先生をぜひ招こうということになり、さてその本名はということになって、はたと

戸惑つてしまったのである。いったい何という名の先生であつたのか一人として正確にいえるものはなく、結局学園をたずねてただったり、古

い職員名簿を調べてもらつたりしたが、いずれも不確かな回答しか得られなく、このことは不明のままに終わつてしまったといわれている。

雨読先生と愛称された人は確かにいた。しかし今はその存在の可能性さえ疑われるような遙かな年月の彼方のことになってしまつ

ている。それにしてもこの付近の古い住民たちは、この風変わりな先生を決して忘れることなく、あざやかに記憶し学園の伝説めいた言い伝

えをしてきたのである。学園本来の精神である晴耕雨読の実学主義は、雨読先生という人の存在によつて強く親しまれ、いつかこの橋の

命名として長く残るようになったのである。もちろん今日の雨読橋は当時のものとは予想もつかぬ変わりようだが、雨読先生は永遠に橋

名となつて残っている。

おやこぎつね

## 親子狐物語

マチのどまん中の四条通りも、その

ころはまだ家屋もポツンポツンとあった程度で、あたりはひどい草叢であつたという

ことである。ある店の主人が、ぼんやりからだを横たえて土間の店先

を見ていると「メートルもあるうかと思われる青大将が、によつきり鎌首をもたげてこちらをにらんでいることもあつたというのである。

そのころはまだ幽霊話もあつた。昔、女学校通りといわれた四丁目

縦小路はほんの歩く程度の道であつたが、この通りを得体の知れない白装束の女性が一人、髪をふりみだしてすたすたと歩いて行くのを

見たとか見ないとか、怪奇な話が入りみだれてひらける以前の昔は判りかねることも多かつたようである。ところで、昔はどこでもよくあつた狐の話は、ここでは親子狐ということになつてゐる。

マチはずれの一軒家に住んでいようものなら、夜の一人歩きは禁物

で、すぐそこにわが家を見ておりながら騙されてぐるぐるの回りをして

どつしても家に着くことはできなかつたといふのである。

これは当時のゴンスケじいさんの話であるが、「その時には、どうも臭



いぞと思つたらわが身をつねつてみよ、あごの下をなでてみよ、そうしてひよいと振り返つてみるよ」と言つてゐる。

このゴンスケじいさんは、「わしはよくそうやったものだが、振り返るとかならず可愛い子狐が後方できちんとお坐りしているのを見る」ということだつた。

「子狐はコンチャンといつてほんとうに可愛い

やつだつた」と繰り返して言つてゐる。

コンコン子狐 えらいぞや

だますばかりが 能じゃない

子狐コンコン えらいぞや

その瞬間に魔術がとけて、わしは急にかつた

の自由を取り返したものだ。だがわしは、わしの

前方でわしを操つて親狐がいたに違いないのに

ただの一度だつてそれを見たことがない。それでも子狐はわしの味方

のようで、わしは親狐を憎んでも子狐は可愛くてしようがなかつた」と

言つてゐる。不思議な親子狐の話はゴンスケじいさんには一つの意味をもつてゐるようだ。

「大人はずるい。子どもは無邪気だ。たとえ知恵のない獣の世界で

もそついうものだ」と言つてゐるようだ。

このことはマチの中でも評判高い話である。



# 妻恋橋物語

つまこいばし

大願おおねがいの学校から約二〇〇メートルばかり北に行った所に大願かいがん会館がある。

その近くにかにもその名にふさわしくない木橋がある。こんな貧弱ひんじやくな木橋になぜそのような名称めいしやうがあるのか不思議ふしぎに

思うことだろう。もともとこの妻恋橋つまこいばしというのは、この住民たちの間にだけ伝えられているロマンがあるのである。この物語が発生したころの大願かいがんはうっそうとした樹林じゆりんにおおわれていたのだが、それを伐採ぼっさいして開墾かいこんし、そこに麦むぎやえん麦えんむぎや芋いもなどを植うえて乏とほしい生活を始めたのである。移民いみんの多くは福井県ふくいけんからの人で、このロマンの中心人物もまたそうである。彼の名をスケジロウといった。

当時の北海道への移民は、内地の食いつぶしや一獲千金いっかくせんきんを夢見た山師根性やましこんじやうの者もあるが、開拓かいたくの志こころざしをいただいて新天地を求めめる者も少なくなかった。スケジロウもその一人で、親もとを出る時には、無理むりに残して来た若い女房にやうぼうに、「かならず暮らしよい所にして、すぐにも迎えに来るから」という頼たのもしい言葉を置いてきたものだった。



ほとんど便りすらできないままに時を過すして、くたくたに体をさいなんで、時には絶望感ぜつぼうかんの中でひたひたと崩くずれてしまう自分をあわれに思うこともあったが、そうした中にも夕日ゆずりだけは無性むじやうに美しかった。

スケジロウは、その時ここにかけられてあった当時はもつと貧弱ひんじやくな木橋こしに腰をおろして、最愛さいあいの妻を心から恋こ慕したったのだった。

スケジロウはおいおいと泣ないた。どんなに大きな声で泣きわめいても誰一人だれとがめだてする者もなかった。

オーイ オーイ

おハナー おハナー

その木魂こたまはうっそうとした樹木がたちまちぬぐいとつてしまい、後にはただただ死せの静寂せいじやくが残のこりだけだった。誰もいないと思われた樹林に誰かが目撃もくげきしていたのだろう。この話は誰から誰へということなく不思議ふしぎに鮮明せんめいに伝えられていった。樹林の中の目や耳がそれらがこのうっそうたる大地のただ一つの命いのちとして、やはり生きていたのである。

しかし、一説いっせつにはそのころこの木橋に腰こしをかけていたのは一匹いっぴきの狸たぬきであったという人もある。なにせ深い夜がくると、あやしげな鳥の羽ふばたき、ふくろうの鳴き声、蒼白あおしろい月影つきかげ、昼間は昼間であたたかも降ふりような蟬時雨せみしぐれである。

ともかく深い幻まぼろしの中のできごとである。それにしても木橋は今もあのようなロマンを物語ろうとしているようである。



# 岩見沢と飲料水

明治十七年十月に岩見沢村が開設されましたが、岩見沢の住民にとつて良質の飲料水の得られないことが生活の悩みでした。

市内を流れる川には利根別川と幾春別川がありますが、水量が少なくいつも濁っていました。

井戸を掘つても泥炭地なので飲料に適さない水でした。明治十七年秋に勧業課派出所は、移住民の入植に備えて井戸を各地に掘らせましたが良い水は出ませんでした。

また、明治十九年には市来知川の上流を堰き止めて、地元の粘土で焼いた土管で水道を設けましたが失敗してしまいました。

岩見沢の市街地は元町から開けていきました。元町の幾春別川沿い



に住む人たちは川の水や崖つぶちからの湧水を利用していました。

川の兩岸は粘土質の自然堤防で傾斜がきびしく、所々に堤防から川岸までいく筋もの水汲み道がつけられていました。

手桶やバケツに水を汲んで堤防の坂道を上り下りするのは大そうきびしい労働でした。水をこぼすと足場は粘土のぬかるみになるし、雨でも降ったら大へんなことでした。夏の暑いときはよしず張りの待合所などが作られました。なかには水汲みを請負って商売をする人もいました。水はとても貴重なものでしたから大切に使いました。

米を洗つてもすぐ捨てないでためておき別な用途に使います。

一番水、二番水、三番水と分けて次々と使い分けました。

こんな不自由な生活の中から水にまつわる笑い話の

ようなものがいくつか記録されています。

二条の東で宿屋をしている家で井戸を掘ったところ大そう良い水が出ました。

すると隣近所の人が「どうかすみませんが」と手桶を持って水をもらいにきます。次から次と水汲みにやつてくるので宿屋では自分の家の水を汲むこともできません。とくに泊りのお客さんがあるときなどは困ってしまいました。



それで井戸に蓋ふたをして錠じょうをかけておきましたが、いつのまにか錠はねじ切られているしまつでした。何かよい名案はないものかと考えた末すえに、小学校に行っている息子が学校から帰ると、井戸の蓋の上にとどつかと座り水番をしました。「すみませんが」と水汲みに近所の人がくると、息子は「うちの井戸だから汲んじゃだめだよ」

「それでも使っていないときは汲んでもいいでしょう」

「だめだよ、うちの井戸だから」

「あんたんとこの井戸でも、人の困っているときには使わせてくれるのがあたりまえでしょう」

「だめだよ、うちの井戸だから」

と言って相手にしません。近所の人  
が親にたのむと、「うちは客商売で  
毎日たくさん水があるのに、小さ  
な井戸なもんだから水も少なく  
たまりません。夜あいている時に  
でも汲んでください」と言われて無情  
を恨みつつ引き上げるしかありま  
せんでした。明治三十三年、一級町

村制が施行されたのをきっかけに水道建設をすることになりました。

岩見沢と三笠の境の一の沢にダムをつくり鉄管で市街地まで水を



一の沢水源池・取水塔

引きました。明治三十九年九月に着工し四十一年十月に完成しました。岩見沢のこの水道は函館につぐ道内二番目の水道で、取水塔しゅすいとうを設ける水道としては道内最初のものでした。市街の各処に設けられた水道栓せんの蛇口じやくちから勢いきおいよくザーツとほとばしるきれいな水を手にうけて、人々は涙なみだを流して喜びあつたということです。

一の沢のダムと取水塔は岩見沢の文化財として、また水道公園として大切に保存ほぞんされています。

『空知のむかし話』空知の民話シリーズ第三集

昭和六十年三月岩見沢町上水道史より

## ひょうたん沼物語

最近できた西川町の西新橋は明るい

感じの橋です。その橋からちよつと

行くと西川向と北村に行く

二つの道につきあたります。

そのうちの北村行きの道を

一・五キロばかり行った左側に子ども

たちや一般の釣り人にも知られているひょうたん沼があります。



沼は東西に横たわり、東側がひょうたんの頭の部分にあたりかなり大きい沼だということですが、周辺は葦や笹などの雑草におおわれていて、沼の形はおろかどこから沼なのかさえさっぱり分かりません。

しかし、この場所はかなり遠くからでも、そこが水のあるところだということは何となく分かります。たぶんこのあたりは湿地帯で低い地面に水が溜まってできたものなのでしょう。釣れる魚はほとんどがフナで、たまにコイが釣れることもあるということです。

このひょうたん沼に古くからいくつかの不思議な言い伝えが残されています。きつと何かに化かされているのだらうというところから、きつねかあるいは沼の主がいるのだといわれています。この沼のへりに立つて何となく水面を眺めていると水の色が七色に変わります。

あたり一面が白っぽくなったかと思うとパッと黄色くなり、そうかと思うと真っ赤に染まったり紫色になったりで、不思議なほどその色は変化します。釣りに夢中になっているときは、ほとんど気づきませんが、後になってから「おやおや、あの沼の水は七色に変わるようだったな」と思いかえすのです。時には突然沼が二つに割れたかと思われるほどの音がして、強烈なキラメキに驚かされることがあります。

それは多分、沼の主が飛びはねたのだといわれていますが、それはいつしか鯉ではないかといわれるようになっています。

きつねにバカされるといわれるのは、この沼をたずねると水がぐんぐん

遠のいて、行けども行けども沼に近づくことができないうのです。気づいてみたら、すでに沼の中かなり深く入りこんでいて思わずギョッとさせられるそうです。

また、ある人の話では、沼の向こうに一人の怪しげな若い女性がいて、その人を招き入れるともいわれています。

いろいろな怪奇じみた話がいくつかありますが、今でもこの沼をたずねる釣り人がかなりいるということです。

ただし、「決して一人で行ってはならぬ」と地元の高老たちは警告しています。

その後、この地域一帯は大規模な土地改良事業や河川改修、用排水路の整備事業などが進められ、現在では美しい田園風景へと姿を変えました。ひょうたん沼は埋立てられてすっかり姿を消しましたが、その跡地は『ひょうたん沼交流広場公園』として整備され、新たな憩いの場となつて人々に親しまれています。



ひょうたん沼交流広場公園

# イッチャン物語

イッチャンという乞食こじきが古くから岩見沢にいた。これほど

市民に親しまれ愛され、そしていまだに忘れられずにいる乞食めずらは珍しいだろう。現在生きておれば九十歳さひぐらいであろう。

市民はイッチャンのことを、

「ああ、あのイッチャンか、イッチャンはね、よい家の出で学校は一中を出ているんだよ」と言う。



一中といえは当時東大ぐらいの値打ねうちちがある本道唯一ゆいいつの名門校であるといわれている。このことについてイッチャンと同年の生まれでかわりの深い広瀬元吉さんがくわしく知っている。しかし広瀬さんは、「イッチャンはよい家の出だが一中は出ていなかった。わたしと同じ学校に通い尋常科四年は出ている。イッチャンの親戚の子でサッポロの学校に行ったのはいるが、イッチャンはそれきりで、どこの学校にも行っていない。親戚の子との間違まちがひであろう」と言っている。

広瀬さんは現在もお元気だが、九十歳のお年寄りだから、あるいは記憶きおくの誤りあやまりはあるうが、このことはそうはつきり言っている。よい家の出に間違まちがひはない。岩見沢では有名な旧家きゅうかの一族いちぞくであろう。

一中を出たというのはイッチャンを愛する市民のフィクションに違ちがいない。イッチャンをそんな風に美化びかしたかった市民の夢にしか過すぎなかつたのだろう。それにしても、一人としてイッチャンを悪くいう者はないのだから不思議ふしぎである。ところで、「イッチャンが乞食こじきを始めたのは、三十代からではなかったか」と広瀬さんはいう。それもせつかく一流商店の大金持ちの家からお嫁よめさんをお願い、商売しょうばいの独立どくりつもできたのに、それからまもなくイッチャンの放浪無頼ほうろうぶらいの生活が始まり、いつか乞食こじきにまで転落てんらくしていったのである。そんなよい家の娘むすめさんをお願い、幸福こうふくな前途ぜんとに満ちていたはずなのに、なぜイッチャンは転落てんらくしていったのだろうか。ここが一つの謎なぞである。本来ならば何ひとつ不平不満もないはずである。そこには何があったのだろうか。夫婦ふうふの仲は他人の決してあずかり知らぬことである。ただ強しいていえば、こんなことはいえよう。嫁はしゃんとした気性のひとであったとか。

「イッチャンはどちらかというと善良ぜんりょうで小心しんしんなところがあった」と広瀬さんは言う。だが、それがどんな誤算ごさんを招くことになったかは第三者の知るところではない。

イッチャンはふいと家を出てしまった。いまの言葉では蒸発じょうぱつということ

とになろう。そうして他国でどんな生活をしてきたか、再び岩見沢にあらわれた時はもうはた目も憚るほどみじめな姿になってきた。

「それにしても余程運の悪い男だったんだね。うまくなければ別ればよいことなのに、両家の古いしきたりに阻まれて伊ッチャン自身はみ出してしまったのだから」そんなふうになつて伊ッチャンは言う。

その伊ッチャンは、戦後もしばらく姿を見せていたのだから、その頃はもう七十歳は過ぎていたのではなからうか。綿のはみ出した丹前を着て頭から毛布をすっぽりかぶり、以外とふくらした優しい顔をして、決して何かをくれとは言わなかった。

ただニコニコと家の前に立っていた。

「あら伊ッチャンだ」と驚いて物をあげていたようである。

「きょうは伊ッチャンが見えないね」と言う言葉が聞かれた。

お金はもらわず、もらえば町内のお世話役だった笹田勘太郎さんという人にあずけて、必要な時に何かを買ってもらっていたというが、さて伊ッチャンの人気には移り変わりはなかった。

そうして戦後ようやく物が豊かになりかけた頃、伊ッチャンの姿は市民の目の前から消え去っていった。

伊ッチャンが住んでいたという通称伊ッチャン橋のそばの小屋は、もちろん今はなくその伊ッチャン橋が、今では四条近代橋として姿を変えている。

まるた

## きつねの丸太物語

当時の岩見沢の丘陵地は大きな原始林でおおわれていました。

その原始林の中で鹿や兎やきつねなどのけもの、鷲、隼、鳶などの大きな鳥から、やまげら、ひわ、うぐいすの

ような小鳥までが数多く楽しく暮らしていたのです。その原始林も次第に

開拓されてきました。今までの

や鳥のすみかになつていた森が畑に

なり、大きな木が切り倒されてゆき

ました。あるきつねのすみかであった

木が切り倒されたので、そのきつねの

すみかがなくなりました。倒した木は

今の教育大学前の明治池寄りの小高い道路わきに置かれ、いつか道行

く村人の一休みする場所になっていました。その木をすみかにしてい

たきつねは、時々森から出てその木に休むことがありました。

きつねはその時、その木に腰をかけている村人をうらみましました。

ある時、一人の医師が馬に乗って通りかかり、この木に腰をかけて休



みました。もうすっかり日が暮れていました。この小高い所からは今の西五丁目の道路がついていませんで、町に入るには神社の方へ向かって野球場の低地まで下り、ポントネベツ川を渡つてもう一度坂を登り神社の前に出てから市内に入るのでした。一休みした医師は一服すると馬に乗つて帰つて行きました。

きつねはその時ちよつといたずらをしました。馬は今来た道の方へ走り坂を下りて明治池を通りすぎ、登つた所から左に回り今の東山ホテルの近くを右にまわつてもとの場所に出て来ました。

「どうしてまちがつたのだろう」医師はびつくりしてもう一度馬を引き返して急いで走つて行きました。しかし、馬はやはり森をぐるぐると一周して明治池の坂を登り、最初の場所に戻つてきました。医師はどうしても家に帰れないのです。

時間はどんどんたつて行きました。とうとう鞍くらから鯨くじらの骨つで吊つついていた小田原提灯おだわらちようちんの灯あかりも消えてしまいました。医師は困こまつて明治池の水門番人の家を起ここしました。

「爺じいさん、爺じいさん起きておくれ」  
爺じいさんはびつくりして起きてきました。  
「おや、先生どうされた。さつきから馬を走らしていなかつたのは先生かね」



「爺じいさん、どうしても家に帰れないのだ。さつきから馬を走らせているが、どうしても同じ所に出てくるのだ」

「それじゃ、きつねにいたずらされたのだろう。先生はきつねの丸太に腰をかけて休んだのだろう。タロー、タロー、出てこい。一つほえろ」と言うその後からアイヌ犬が出て来て一声大きくワンワンとほえました。

「さあ先生、きつねも森に帰つたろう。わしがついてゆくで一緒に病院に帰りましょう。タロウや、ついてこい」と言い、それから爺じいさんの案内で神社の方を通つて病院に帰ることができました。

その後、時々夕方おそくこの木に腰をかけて休む人は、行先が判わからなくなるので、いつか村人は『きつねの丸太』と呼んで、この木には腰をかけて休まなくなりました。そのかわり、小さな丸太をその前に置いてそこで休むようになりました。この丸太の根元の方は、私が小学校時代までそのままに置かれてあり、中が大きならうくうどう(空洞)になっていました。そして、犬をつれて行けば大丈夫、だまされることはないといわれていました。また、お供物そなえものをしてから休むとよいともいわれており、よくお供物が供えてあつたものでした。

#### 《参考》

・この時の医師は私(伊東博)の父親です。駿馬しゅんまは英俊号えいしゅんごうというハクニ種くりげの栗毛しゅまほの種牡馬しゅまほでした。このあと伊東家所有の山の番人が同じ所で同じようなことになっています。

# 出かけられる神様

ずっと昔のお話です。北海道が『えぞ』と呼ばれていた頃です。山には大きな木が茂り、熊やきつねや鹿があそび、石狩川にも幌向川にも多くの魚が泳いでいました。土地のよい場所に僅かな人々しか住んでいませんでした。仙吉という若者も

その一人でした。人々は部落の小高い丘に小さな祠をたてて氏神様として大切にしてきました。

いつかのぼりや太鼓が寄進され、春と秋にはお祭りが行われるよう

になりました。峠一つ向こうに小さな

道をつくった記念に新しく道祖神を祀ることにしました。

その御神体を仙吉のいる部落の神社から分身することになり、秋のよい日を選んで分身するお祭りが盛大にされ、若者が新しいみこしをかついで道祖神に納めに行きました。

それから何年かたちますと、誰もお詣りをする人もいなくなりま



お詣りをしていました。ある時はとつてきた魚を供え、ある時は畠でとれた薯を供え、時には野の花を、秋には山ぶどうやこくわの実などを供えたこともありました。そうしているうちに仙吉はいつか部落の中でおもだった人を選ばれるようになりました。そして、時には近くの部落にも招かれてゆくような立派な人になりました。

ある秋の日でした。少し遠い小さな部落に寄り合いがあり仙吉も招かれて朝早く出かけました。峠の道祖神にいつものようにお詣りをして行きました。むずかしい寄り合いの話は夕方おそくまで続きましたが集まった人々は仙吉の話に意見がまとまり、仙吉も大役を果たして帰ることになりました。夜道を提灯を頼りに峠道を歩いているうちに、いつか藪原の中の道にまよいこんでしまいました。

どんよりと曇った夜空には星一つ見えません。遠くの方でなにやらけものほえる声があ

ざまじく聞こえてきました。

仙吉は途方にくれました。

持つている提灯の明かりもなくなりました。

そして、まっ暗やみの中に唯一人おかれていました。仙吉は一心に神様に祈りました。その時でした。遠くの方から、「仙吉やーい」と呼ぶ声が聞こえてきたのです。



そして提灯をつけた老人が近寄って来ました。

「やあー。こんな所にいたのかや。さあ、私と一緒に村へ帰ろうぞ」とその老人が声をかけると先にたつて歩き始めました。

今まで藪原であったと思っていたのに老人の歩くところはせまいけれども村の道と変わらないのです。そしてすぐにも仙吉がお詣りをしていた小さな道祖神の前に着きました。

「ご老人」と仙吉は問いかけました。

「ご老人はどちらの方ですか。私は仙吉と申す者ですが、ご老人はどうして私があこの山の中にまよっていたことを知られたのですか」と申しました。すると老人は、「いや今朝お前さんが出がけに寄っていたのでなあ」と言い、「さあこれを持ってお帰り。此処からならもう大丈夫だろうから」と仙吉に提灯を渡すとすうつと消えて行きました。

仙吉これは神様だと思い、道祖神の前に走って行って何度もお礼をいって神様からもらった提灯を頼りに家に帰ってきました。

この話が多くの人々に伝えられ、小さな道祖神にお詣りする人が多くなりました。そして旅に出かける時には必ずこの神様に無事を祈ることになりました。そして無事に旅から帰ってくるとお礼詣りに行くことがならわしになりました。今もこの神様は時々道にまよった人を助けに出かけられるといわれています。

## シムプンベツ物語

岩見沢の南側一帯、幌向川に沿った地域はその昔、「これより先は幌向原野」と一まとめにして呼ばれていました。このころはまだ開拓に入った人もおりませんから別に不自由なこともなく過ごしてきました。その幌向原野と呼ばれていた土地に何戸かの開拓農家が入ってきました。幌向川の近くに家を建てた人もいます。

少し離れた丘の裾に家を建てた人もいました。多くの人々は、一抱えも二抱えもある大きな木を切り倒し、排水を掘り道をつけ、川には丸太橋を架け畑を耕し一生懸命に働きました。

小高い利根別の丘から冷たいきれいな川が流れていました。いつもたくさんのうぐいが取れました。昔から誰いうとなくこの川を『シムプンベツ』と呼んで大切にしていました。きっと大昔この付近に住んでいた人たちがそう呼んでいたのでしょう。

それは、『うぐいが取れる川』という意味だそうです。





その後も多くの開拓農家が入ってきました。村人たちは子どもたちに立派りっぱな人になって欲しいと考ほえ学校を建てることにしました。

すぐ学校が建たないので、とりあえず寺子屋式の教育所を建てることにしました。人々はみんな力をあわせて建築の手伝いをし程なく立派にできたのです。さて、この教育所の名前をどうしようかと相談しました。まだこの土地の名前もついていません。

そこで主だった人々が集まり相談の結果、昔から大切にしていたシユンベツ川の名前をとってシユンと呼び、文字は学問をして立派な人になるのだから、「文ふみに志こころ」としてどうかと相談がまとまり、『志文』と名付けることになりました。

本当に立派な名前だとみんなが心から同意しました。そこでこの地域の名を志文と呼び教育所を志文教育所と名付けました。

志文と名付けた人は、志文開拓の功労者であり町会議員などいくつもの公職につき岩見沢の発展に貢献した辻村直四郎さんです。

辻村直四郎さんの功績を讃たたえて志文小学校の前に立派な記念碑きねんひが建てられています。その後、志文の人々は水田を開くためにシユンベツ川の上流にダムをつくり、金志土功組合一七三町歩(一七三ヘクタール)の水田を開発しました。

この貯水池は今でも利根別自然休養林の中にあります。

## こだま 木霊物語

開墾かいこんしたばかりの土地には、まるで墓石はかいしのように切り株かぶが並んでいます。その切り株が大きければ原始林を伐り開いた後であり、小さければ以前に一度開墾して畑にした土地が荒らされて二十年か三十年してもう一度やり直した土地だという見当がつかますし、切り株が五尺も六尺も長く残っているのは雪の多かつた冬の雪の上で伐木ぼくぼくしたということが分かります。それから切り株の腐れ具合を見ると、この土地は何年前に開墾されたかという見当もつかます。

原始林であつた土地から全ての切り株が姿を消すには少なくとも三十年以上はかかります。しかし、木の種類によつては腐れやすいのと腐り難いのがあから



一様にも言えません。ハンノキやシラカバなどはあまり大きくならず、たいていは開墾して三、四年で根が腐るから蹴飛ばしただけでも簡単かんたんにひっくり返るし、ドスナラなどと情けない名で呼ばれるハシドイなど

も直根がなくて上根ばかりだからすぐに片付けることができます。

二レとかナラ、ヤチダモ、カツラなどになると、岩のように頑としていて優秀な抜根機かダイナマイトを仕掛ける火薬抜根でもやらない限り、二十年、三十年はビクともせず、プラウをこわすなど農作業の邪魔になり、たいていはエゾリスや小鳥たちの餌台になったり雑草の集積場としての役割を果たしているだけでした。

生き物にはみんな霊（魂）があります。昔は生き物でなくとも魂が宿っていると思われていました。村人たちは魂の宿っているものを大切に、時には祠を建ててお祀りをしたり、時にはしめ縄を張って大切にしたものでした。岩見沢にも昔は大きな樹が茂っていましたが、その大きな木の中でも何本かに木霊が宿っていたのでした。

人々は早く開墾しなければなりませんので、自分の持ち場の土地の大木を次々に切り倒してゆきました。そして、あちこちに集めると火をつけました。天を焦がすような勢いで木は燃えてゆきます。

二日も三日も燃えてゆきました。燃え終わると人々はそのあとに麦やいもなどを蒔きました。

畑という文字は、こうしたことから作られた文字であるといわれています。即ち火と田の組み合わせです。こうして切り倒して火をつけて焼いたあとにも、いくつかの大きな木の切り株が残っていました。

小さなものは根元から掘り起こしましたが、中にはあまり大きくて

そのままにしておいた木の根もありました。何年も何十年もこうした大きな切り株は畑の中にデンと立っていました。これが木霊の宿っている木であったのです。そのあたりは開拓が始まってから二十年も三十年もたつてすっかり開けた農地でした。しかし、木霊の宿った木の株は外側に苔が生えましたがまだ畑の中に立っていたのです。

ある秋の夜、仙吉は急な用で峠を越えて隣村まで出掛けました。その日は朝から冷たい霧雨のような細かい雨が降っていました。

夕方から僅かに風が吹き始め、夜遅く帰るころにはもう雨はすっかり止んでいましたが風はなおも吹いています。

仙吉は峠を越えました。村里の小さな林を抜けるとあと僅かな道のりです。仙吉はいつも通る林の中の道を歩いていました。

風が林の上を音をたてて過ぎて行きます。

丁度その時です。遠くの方でぼんやりと白く光っているものが見えました。何も見える筈のない林の中で白く光っているのです。

仙吉は驚いて足を止めました。

何が光っているのか判りません。今まで何度もこの林を通りながら、ついぞ一度も見ることがありません。そして、その光っているもののある所はもともと何もない所です。

仙吉は背中がスウツと冷たくなりました。

林の中はしんと静まりかえっています。

仙吉は立ち止まったまま神様に祈りました。

そして、もう一度その方を見るとやはり光っています。そして風が吹く度にチラリ、チラリとその光るものが小さく下に散ってゆくのでした。

仙吉は勇気を出して一歩、二歩とだんだん近寄ってゆきました。

近寄るにしたがつてその光るものが次第にうすくなりついに見えなくなりました。

仙吉はなおも近寄りました。

そして、ついに大きな木の切り株の前に出ました。それは何十年も前にこの土地が開拓される時に切り倒された一番大きな木の切り株でした。

今はすっかり朽ちて苔が生えていました。仙吉は村人が話をする木霊の宿っている木の主はこの切り株であろうと思い、小枝でとりあえず柵をつくると急いで村に帰りました。

翌日人々はこの話を聞き、相談の上この切り株がすっぽり入る祠を建ててお祀りすることにしました。それからこうしたことがなく仙吉の村は平和に暮らしたといえます。



## とう ぼう しゆう 逃亡囚物語

北海道行刑史をみると樺戸集治監では、明治十八年（一八八五年）に大集団の脱獄事件があったようである。

集治監の創設当時は、本州の政治犯がほとんどで、それがこのころには極悪犯に変わっているようである。従って、警備の看守はピストルには極悪犯に許されている。逃走した囚人はおおかた札幌付近の村落に出没して強盗や窃盗はもちろん、暴行、脅迫といったあらゆる暴虐の限りをつくし、そのために住民は戦々恐々として昼でも戸窓をとぎして外出を止めたとはいわれている。集団の多くは札幌近郊に向かったものの、中には脱落したり方向を転じたりして、行刑史の記録では、全部が逮捕されたことにはなっていない。その行く末はいろいろ取りざた取沙汰されているのも最もな話である。

追跡に加わった看守の中には、野原の足跡をたどって、あるところで糞便を発見している。その大胆不敵なやりかたに舌を巻くこともあったというが、こんな奴はどうてい捕めぬとして追跡をやめたということである。空腹のために野たれ死にしたものもあつたそうなる。

樺戸集治監は岩見沢に近いことから、逃亡囚人についてつぎのよう

な物語がある。

この囚人は例の集団逃亡囚の一人であつて実刑は重かつたがそれは飽くまでも誤つての殺人で故意でなかつたというこゝとである。彼は巧みに警戒網をくぐりぬけ、ポツンとさびしい一軒家の民家に辿り着いた。もちろんその服装からしても、



これが囚人と大体わかつておびえていると、簡単に自分の罪状の真偽を語つて食べ物を乞うたということである。この家の主人はなかなか落ち着いた人で食べ物を与えて、「あなたは逃げ場に困つているのだからからアイヌ部落を訪ねてごらんさい。そこならあなたを匿つてくれるに違いない」と教えてやった。囚人は深く感謝して身をひるがえしたということである。そこは通称ポントネといわれる今の東山町で、岩見沢ではこの地にアイヌ部落があつたといわれている所である。アイヌの人情は純粹であつた。たとえ言葉が通じなかつたとしても囚人の真意は通つたものようである。ということとは、それから何年かたつて何処からともなく逃亡囚のうわさが町に流れた。それには、アイヌ部落にそれらしいのがいるということであつた。

だが、それはあくまでも町のうわさにとどまつた。もしも仮にその囚人がアイヌ娘と結婚し、子どもができ、あれからもはや伝説のように風化してしまつていたら、この逃亡囚の罪を人は今も憎むであろうか。これもひとつの物語にしか過ぎなくなつてゐる。

## ひどじょう物語

数少ない岩見沢の名物として『ひどじょう』をあげることができる。

今は亡くなられたが、短いその半生をかけた

どじょうの神様とまでいわれた遠藤精一さん

がいて、その養殖にたいへん努力されて

いたようである。

ひどじょうというのは、ひと口に

えび赤どじょうのことで、健康で快適

なときはいっばんに赤色を増し、そう

でないときは黄色ががってきて、しだいに

白色になるといわれている。しかし、不思議な

ことにはこの魚の目はいつもパッチリと澄み切つていて、黒色であたかも清純な少女のように見えるという。



それはその通りで、これにはつぎのような物語があるのである。

岩見沢は、開拓使がホロナイ炭山にいたる道路を切り拓くため、多くの労働者に湯浴みさせた所から由来して名づけられたといわれている。その頃の幾春別川には鮭がよくのぼったといわれ、昼なお暗い沢には熊や鹿が往来していたともいわれている。そんなことから、ここらあたりがアイヌの狩猟場として好適の場所、多くのアイヌたちがさかんに駆け回っていたようである。そうした狩猟を生業とするアイヌの中に人のよさそうな老夫婦とメノコ、フミカがいた。このアイヌ一家は、ささやかながら仕合わせな日々を過ごしていたといえる。

一人娘のフミカは近郷のメノコの中では、美女の中の美女といわれ、老夫婦にとっては目の中に入れても痛くなかったのである。ところが、ちようどその頃、鉄道建設のためこの地を訪れていた和人の青年技師に五一という者がいて、いつか二人は深い仲になってしまった。

殊にアイヌ娘フミカは、おのれの清純な愛情をかたむけて、昼は昼でその仕事場を訪れ、夜は夜でその逢う瀬を楽しんでいた。もはや二人にとっては、結ばれる以外には道はなかったようである。もちろんフミカは五一を深く愛し、ひそかに夫婦の契りを固めていた。

このことは当然仕事場のうわさにならずにおかなかつたし、仕事場の男たちは、いったいこの青年はどういうつもりで付き合っているのかとひとごとながら案じていたようである。男たちの間では、この青年に

は本州の故郷に妻子のあることは知られていた。それは全く風の便りといつてもよいだろう。そんなふうな伝わり方で誰かがそとフミカにこのことをささやいたようだ。フミカは愕然として目先が真っ暗になってしまった。このことをすぐさま五一に問いただそうとしたが、純情なフミカにはそれは余りにも恐ろしいことであった。

フミカの苦しみは絶えることがなかった。それと同時に青年五一に会うこともぶつりと途絶えてしまった。しかし、一度ははつきりと五一の口からその真実を聞きたかつたのである。五一にしてみればフミカがなぜ自分に会わぬようになったかは、周囲の状況からそれとなく察するようになり、もはやフミカには会えぬものと覚悟していた。

ある夜、眠れぬまま悶え苦しむ二人は偶然にも森の中で会ってしまった。つかつかと突き進んで歩みよつた五一は、その一部始終を語り深く頭をたれた。フミカの心は決まった。最初に思ったことが現実となつてしまったわが身をあわれに思った。

あわれ二十三の春は散つた。しかし、そのピリカ、メノコの一途な思慕の念は一夜明けてひどじようと化し、悲しくもまた清く石狩の川や沼にさまよい続けることとなつたのである。

さきんざわ

## 砂金沢物語

今の玉泉園を少し東山峠

の方に行つた右側の丘陵地に、

この付近で一番早く雪の融け

る広い小高い斜面があります。丘の下にはきれいな小川が流れ、アイ

又たちはポントネベツと名付けていました。

ポントネベツは美しい小石(今のジャスパール)のたくさんある小川で、

よく鹿や小鳥が遊びに来ていました。アイ又たちはその広い小高い斜

面にやじりなどを作る小屋を建てていました。何人かの若者はそこで

作つたやじりを持って近くの山に狩に出かけ、たくさんえものの獲物をいろいろ

ろ手がけて毛皮などを作るのでした。そのポントネベツに落ちこむ小

さな小川にはザリガニや緋どじょうがたくさん遊んでいました。

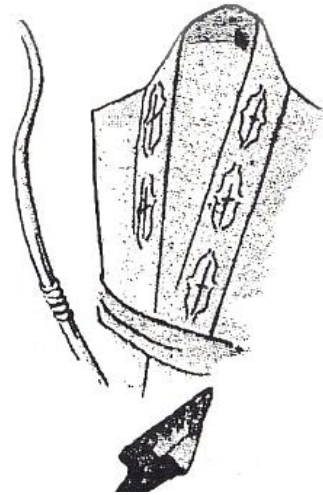
ある日、若い酋長のむすこが昼休みにザリガニを捕りに川の落口へ

行つてあちこちと小石を返してたくさんザリガニをとっていました。

すると黄金色をしたザリガニが見つかりました。彼は喜んで持つて

帰り仕事を休んでいた若者を集めて見せました。

その時、黄金色をしたザリガニが言いました。



「若い酋長さま、私を助けてください。そしてあの小川であそぶザリガニや緋どじょうを捕らないでください。そのお礼にどんなに雨が降らなくとも、ポントネベツの水はかれることがないでしょう」

しかし、若い酋長のむすこは、「いやその位のことでお前を許してやることはできないぞ。もつとよいものを出さなければだめだ」

黄金色のザリガニは、「それでは若い酋長さま、あなたが毎日とつておられた魚の数だけ、この小川に金の砂を流してあげましょう」と言

つたので若い酋長のむすこは、黄金色のザリガニとかたい約束をして放してやりました。その後、この地方に入って来た和人がこの沢の魚をと

ると必ず砂金がついていました。和人はあらそつて魚をとつて砂金を集めました。いつかこの沢を砂金沢と呼ぶようになりました。

和人はわれもわれもこの沢に入つて

魚をとりました。そして、とうとうす

べての魚を捕りつくしてしまいました。

その時にはもうどこを捜しても砂金

は見当たらなくなりました。そして、

今までたくさん泳いでいた魚もザリガニ

も緋どじょうもいなくなりました。

いつかアイヌ族も狩に来ることもなく

なり、ただ小さな小川のせせらぎがあるだけになってしまいました。



# 恋沼物語

ずっと昔のことであった。

一軒の開拓農家が草深い

中にポツンと建っていた。

その家の近くには大中小の三つの

沼があつて、農家は一番大きな沼の

そばに建っていて、人々は三つの沼をあわせて三鏡沼と呼んでいた。

大きな沼にも小さな沼にも川魚といえは鮒だけであつた。その外の

魚は何一つ釣れることがなかつた。大きな沼は青くすみ小さな波さ

えも立たないほどの一番深そうな沼であつて、水も一番冷たい沼であ

つた。この三つの沼はどこからも入ってくる川がなく、この大きな沼の

底から水が湧き出てくるようであつた。いつも青空を映し、夏などは

真っ白い雲の形を美しく映していた。農家の人々はこの大きな沼を鏡

沼と呼んで用水にして使うことはせず、中の沼に棧橋をつくり、そこ

から水を汲んだり洗濯をしたりすることにしていた。春の日射しに畑

を耕し大豆や馬鈴薯やとうきびを播いた。そしてそれらがすくす

くと育ち、秋にはたくさんの稔りがあつた。



毎年毎年そうした幸福な年が続いた。

ある日、農家の長男に美しいお嫁さんがきた。それでその農家は今まで以上に賑かになり、毎日の食事や洗濯はお嫁さんの仕事となり楽しい日々が続いていた。一年が過ぎ二年目の冬がやってきたある日、長男は村人とともに狩に行くことになった。

お嫁さんは、「そんなあぶないことはしない方がよい」と引きとめたが、「村人と大勢で行くのであぶなくない」と言つて出かけて行つたところ、なだれにあつて亡くなつたと知らせがあつたきり、ついに帰つてはこなかつた。お嫁さんは悲しんで何日も何日も泣き続けていた。それからお嫁さんはだんだん無口になり、亡くなつた夫のことばかり思つていた。ある日、お嫁さんはいつものように中の沼に洗濯に行つた。

棧橋から手を出して、きれいな沼の水で亡くなつた夫の着物などを洗つていると、急に日がかけてきて水面になつかしい夫の姿が映つていではないか。お嫁さんは喜んで水に映つた夫にすがりつくように水の中に入つて行つた。その後には小さな波がただよつただけであつた。

夕方になつて家の人がお嫁さんの姿が見えないのであちこちと捜したが、ついにその姿もなにも残つてはいなかつた。しかし、毎年お嫁さんのいなくなつた頃になると中の沼に楽しそうな二人の姿が見えることがあつた。そして、その後は中の沼にだけ鯉がたくさんすむようになり、一匹の鯉を釣ると同じ場所から必ずもう一匹の鯉が釣れるよう

になった。しかし、その場所ではどうしてもそれ以上釣れることがなかった。釣人たちは、いつからかしらこの中の沼を恋沼と呼ぶようになった。何年か過ぎて沼のそばにあった

家も人もよそに移り沼だけが残り、中の沼はよい釣場となったが、もう

その時は恋沼から鯉沼と文字が変わ

ってしまった。今も上幌向東十二号

の北の方に小さな沼がやはり同じよう

に三つ並んでおり、鏡沼、鯉沼、鮒沼と

呼ばれている。きつとこの物語の鏡沼、

鯉沼、鮒沼がこの沼であるかも知れ

ないと、この物語を語ってくれた老人が小さな声でつぶやいていた。



現在の恋沼

## カボチャ黄痘

おうだん

開拓が始まってから十年、二十年とたちました。しかし、まだまだ

食事などは今とちがつてまずしいものだったのです。とてもお米だけの

ご飯などは、めつたに食へることはありませんでした。

よほど暮らしのよい家でもお米と麦が半々ぐらいで、ほとんどの家

では菜めしといつてお米と麦に大根の葉などをきざんで入れたものや  
いもの雑炊などでした。それだけにどこの家でも秋になるとカボチャ  
がご飯のかわりだったのです。朝もカボチャ、昼も晩もカボチャ、そし  
て三時のおやつもカボチャでした。

毎日毎日カボチャを食べているうちに誰彼の区別なく、みんなが少  
しずつ黄色くなってきました。そのうちに下着につく汗にも色がつく  
のか、下着もだんだん黄色くなってくるのでした。ある日、子どもたち  
が集まって誰が一番黄色くなったか比べてみるようになりました。

「太郎ちゃんが黄色い。いや、次郎ちゃんの方が黄色い。千代ちゃん  
が一番だ」などと言いながらぐつと手をにぎりしめてゆつくりと開く  
とその黄色さがよくわかりました。「みんな黄色いや。でも次郎ちゃ  
んのは黄色でなく黒いや」と言うと、次郎ちゃんはペッペツと手につば  
をしてごしごしと着物にこすると黄色くなりました。しかし、誰の手  
のひらも黄色なので順番がつかえません。

「今年は、みんな同じくらいカボチャを食べたんだね」ということにな  
りました。そんな遊びをしているうちに、山ぶどうもこくわの実も  
なくなり、木の葉もすっかり落ちてチラチラと雪が降る季節になつて  
きました。その頃になると、もうどここの家にもカボチャがなくなりま  
した。今度はごしごしいもがご飯のかわりになりました。

朝も昼も夜もごしごしいもばかりでした。夜なべをしておながすく



と炉の中で焼いていたいもをほり出して食べるのでした。

こうしてごしよいもを食べているうちに、黄色くなった肌も手のひらも次第に色がうすくなってくるのです。そして雪のとける春になる頃は、村の人々はみんな普通の肌の色よりも、もつともつと白くきれいな肌になるの

でした。開拓の頃は、こうしたことが毎年毎年続きました。大人も子どもも、男も

女も、秋にはカボチャを食べて黄色くなり、春にはごしよいもを食べて白くなるのでした。

そして秋にカボチャを食べて黄色くなると、誰いうとなく「カボチャ黄疸になった」というようになりました。本当の黄疸なら病気で

けれど、これは病気ではないカボチャ黄疸といわれ、開拓

当時から長い間みんなが毎年かかった黄疸といわれています。

### 《参考》

・北海道のカボチャは、明治初年にアメリカから輸入されたデリシヤスカボチャとハッピードカボチャの二つの系統が主でした。

・デリシヤスカボチャはカステラカボチャともいわれ、ハッピードカボチャは皮が厚くてかたいので、マサカリやナタでないと割れないので、マサカリカボチャ、または、ナタカボチャという名がついていました。



ぶれいもの

## 無礼者物語

明治二十年頃の岩見沢の原型と

いえば、狩野渡し場(今の狩野橋)

からずつと踏切に向かつて元町通り

があり、この通りには右手に駅停を

含む若干の家があった。

もちろん岩見沢のマチの発祥地と

してこの踏切から左手の鉄道沿いに、まず

岩見沢駅があつてその倉庫、勸業課派出所、

三浦医院、警察派出所、戸長役場、幾春別川寄りに岩見沢神社(今の

岩見沢神社の発祥)など主要なものがあつたようである。なお反対側

の踏切以西にはわずかに連なつて数えるほどの民家があつた。

こういう初期の岩見沢のマチが、やがて元町からその鉄道を越え、

というより踏切を越えて当時夕張通りといわれた今の中央通りにつ

ながら、これを幹線として発展していることは明らかである。

つまり発祥当時のマチの原型から飛躍的に大きな舞台を求めていっ

たものといえるのである。



明治二十五年には、現在地に岩見沢駅が移転している。マチの構想はさらにもっと幅広くなつてゆくことはいうまでもない。

ところで、この頃は現在の一条西一丁目あたりが、マチの目抜き通りという様相をみせているのも面白い。というのは、ここに岩見沢の名家である三谷、柿本、山口という家並みが立ち並んだことである。このことは大正十五年の

大火後はいつそう明らかで、当時の写真で見ると、この三家が



石造りであり、向かいの信金のところに札幌から、⊕・マルイボン支店が、その頃には珍しい高層の建築を見せている。今にして思えば、ハイカラ過ぎるマチ並で、当時駅前には増築された田村旅館があつて、ここにはガス燈が立てられ、風雅な情緒があつたといわれている。

この頃から「キタキタ、キタキタ、キタワイナ」と歌うようにやつてくる辻占の姿も現れはじめた。

昭和二、三年頃になると、岩見沢にもハイヤー会社ができ、続いて佐竹病院、北原呉服店などが家用自動車を持つようになり、マチの中を走る自動車の姿もちらほら見られるようになった。

それは人いやしからぬ、どこかきりつとしたお婆さんの話である。

当時自動車に乗るといふことは、凡人のできることではなかった。

そのお婆さんがどこからともなくすたすたと現れて一台のクルマを呼び止めた。するとそれつとばかり、そこらの子どもたちが駆けよつてきた。わいわいもの珍し気にぎわめく子どもたちをいったん乗りかけた例のお婆さんが、きりつと振り返るといきなり「無礼者！」とどなった。その声のきびしさに、子どもたちは思わずたじろぎ、一斉にワアーと飛び散つていったが、それにしてもあの鶴の一声は、いったいどこから出てきたのだろう。

明治のお婆さんと自動車。たとえ文明開化の中で育つたとはいえ、そのどこかには、まだほのかな貴族的な匂いのあるこの逸話は、なかなか忘れ得ないものとして今もほほえましく伝えられている。

## くいちがい道路

昔は道路があまりついていませんでした。

開拓を進めるにはどうしても道路がなければ何もできません。

そこで、いくつもの測量班がそれぞれ道路の測量を始め、清吉の班は南の方から、信太郎の班は北の方から測量をしてきました。

南の方から測量をしてきた清吉の班は、岩見沢のお茶の水を通つて北村との境界まで、北の方から測量してきた信太郎の班は、北村の幌

達布を通じて岩見沢との境界まででした。

そこで清吉の班の測量と信太郎の班の測量が出会い、一直線に南から北に通ずる道路になる筈でした。

ちやうどこの村界に徳兵衛と呼ばれる人の開拓小屋がポツンと建っていました。徳兵衛さんのところでは男ばかりの子どもの中にお千代という娘がいました。お千代は母親と一緒に家の中の仕事をすませると畑の仕事も手伝う気立ての良い美しい娘でした。

南の方から測量をしてきた清吉も、北の方から測量をしてきた信太郎もお千代に恋をしました。

お千代も清吉と信太郎の男らしさにひかれましたが、どちらとも決めかねていました。清吉と信太郎は徳兵衛爺さんに、「お千代さんをお嫁にほしい」と申し出ました。

「そうさなあ」と徳兵衛爺さんが言いました。そして、「二人とも立派な測量技師だから、今二人がしている仕事が早く正しくできた方に嫁にやることにしよう」と言いました。この話が信太郎の班にも、清吉の班にも伝わりました。清吉の班では午前中に測量して午後はずっと翌日の測量のための準備をすることに決まりました。

一方、信太郎の班では午前中に測量の準備をして午後測量をすることに決まりました。清吉は南から、信太郎は北から測量を始めました。そして、同じ日に岩見沢と北村との境界で二人の測量が終わった

たのです。しかし、不思議な事には、二人が正しく測量をしてきたのに、どこでどちらの方がまちがったのか一直線にはなりません。清吉も信太郎も、自分のした測量が正しいと言い張りました。

いよいよ検査の日がきました。二人の測量が一つ一つ検査されましたが何一つ間違いはありませんでした。ただ、清吉の班は北に向かって右側から日が当たり、午後から測量した信太郎の方は南に向かって右側から日が当たるので、ちやうど反対に日が当たったことになりました。それで光と影のため同じ測量でも少しずつ違ったのではないかといわれました。しかし、その時にはいつか徳兵衛爺さん一家はもう開拓小屋にはいませんでした。もちろんお千代さんも見当たりません。

どこに行ったものか誰も知りませんでした。そして、清吉の班も信太郎の班も次の測量にそれぞれ出かけて行きました。

あとには村界で食い違った道路が残りました。

現在、上幌向町東十一号道路が北村との村界で食い違っていますから、あるいは

この道路のできた時のことも知れません。



# ほものし 彫り物師物語

北村から岩見沢に移り住ん

だ彫り物師の海老江さんは、

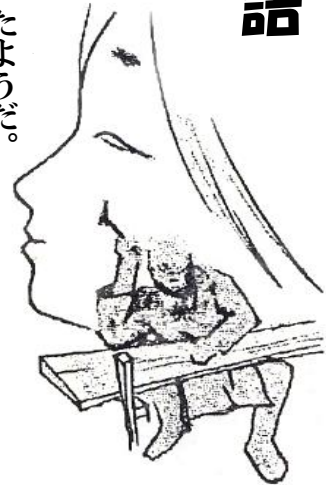
もうその頃は、七十歳にはなっていたようだ。

当時の元町、殊に畑一番地、今の一条東あたりは人家もまばらで昼もさびしい所であったという。

そんな具合だから畑一番地の幾春別川寄りには、岩見沢神社の発祥となる小さな神社があり、そこへ行く道が神社通りといわれていて、夜などはもちろん人っ子一人通らなかつた。

彫り物師の海老江さんは、この神社通りの中ほどに住んでいた。

その近所であった曾川辰太郎少年は、よくこの海老江さんの家に遊びに行ったといわれている。辰太郎少年は十八歳で大工、ともに北村に住んでいたこともあって、年齢こそたいへんな違いだが、かなり心安くたずねたようだ。それに同じ手職である辰太郎少年にはそんなことが興味をひいたのかも知れない。海老江老人はいわば職人氣質というか、何もしないときは朝から晩までごろごろしている。しかし、いったん気が向くとなるとひと晩寝ずにでもやる。それを案ずる心優し



いたった一人の娘がいた。それも貰いつ子で老人にはほんとうの子どもがいなかつた。連れの婆さんは北村時代に亡くなっていた。

この娘は老人にとつては唯一の助け手であつた。どこかさびしい影を漂わせていた老人だが、それでもこの娘がうつろな気持ち満たしてくれた。そんなこんなで老人は子どもが好きであつたらしい。

辰太郎少年もこの老人からいろいろな話を聞いている。その中で当時樺戸集治監にいた五寸釘虎吉の話が一番面白かつた。

虎吉が脱獄したときのことである。樺戸をぬけるには石狩川を渡らねばならぬ。思案のあげく虎吉は名案を思いついた。それがあの長い竹筒をくわえて渡つたという話である。

辰太郎少年は一度老人の名作をこの目でみたいと思つた。しかし職人氣質のこの老人はめつたに鑿をふるつてみせることはなかつた。

ところがそうしたある日、老人に異様な変化が起つた。あの話好きで子ども好きの老人がぴたりと人を寄せつけなくなつた。老人は瘦せ始めいつそう無口になつてひどい孤独感が漂い始めた。しかし、それも二、三日すると陽気が返り、次第に活気をとりのどすと長い長い苦悶と根氣の日が続いた。あれは確か半年もかかつたらうか。

ついに大作はできあがつた。それは方形の三つの続きのものである。ある寺の檀家たちが寄進するものというのであつた。辰太郎少年は期待したが、できあがつたものはまことに荒削りでわけのわからぬ

ものであった。それから話はずつと後年のことになる。

辰太郎さんはあの大戦争で出征したが、敗戦後間もなく樺太から引揚げてきて、何か法要のおり偶然にも阿弥陀寺本堂の六間欄間でこの彫り物を発見した。その時辰太郎さんはアツと驚きの声をあげたくらいである。直感でそれが海老江老人のあの彫り物とわかったということである。しかし、それにしても何と立派なものであろう。あの時の彫り物の動きがこんなに生きているとは思わなかったという。

その彫り物には、紛れもなく海老江老人の製作であるという証拠のようなあの天女の顔があった。じつとそれを見ていると、いつかあの時の娘おさきさんにそっくり似てきたというのである。それでは海老江老人が精魂をこめて彫ったものは、おさきさんへの愛情であったのか。とすると、天女はおさき天女であったというわけである。

## 埋もれていた土功の碑

明治の初めはまだ岩見沢村という村がありませんでした。しかし、今の三笠市幌内炭鉱を開くために多くの人々が入って来ましたから、米、魚、味噌などの外、工事に使うたくさんの材料などが岩見沢を通じて奥へ奥へと運ばれてゆきました。そのために道路工事が盛んに

なり、渡し場とか追分といわれる交通のよい場所には

人家が並び商店や旅人宿、そして、酒を飲ませる一ぱい屋が何軒かできたのです。夕方になるとそうした店はなかなかの賑わいでした。そうした中で長いことかかった工事が終わり、人々はそれを記念して石碑を建てて三日三晩お祭りをして

お祝いをしました。それから何十年もたちますと人々はよそに移つてしまい、その当

時の苦労などは次第に忘れられてしまいました。そして、だれもこの記念の碑をお祭りする人もいなくなりました。

そんなある年、大雨が降り続き幾春別川が氾濫し一面の水害になったのです。秋の稔りを前に人々は僅かな荷物を背負つてやつとこ

とで高台にのがれて、水の引くのを今日か明日かと待ちました。十日近くかかってやっと水が引いたものの、せつかく耕した畑は一面の泥と上流からの流木などがあちこちに散らばり、道路も畑も見分けがつかない本当におそろしいすがたの土地になりました。

しかし、みんな力を合わせて働いたので、前よりも立派な畑もでき、前以上に立派な家も建ち並びましたが、この水害で記念に建てた石碑がたおれ、流れて来た土の中に埋もれて見えなくなつてしまいま



した。人々はもうそんな石碑のことなどすっかり忘れてしまっていた。そして、石碑の埋まっていたところあたりも新しく移ってきた人が畑を作ることになりました。その人は麦や野菜をまきましたが不思議とその人の畑の作物だけがよく稔りません。その畑をつくっていた人はあきらめてとうとうその土地に移って行きました。そして、また別な人がきて同じ場所で作っていました。前の人と同じようによいとり入れがありません。村の人々は不思議に思いました。

「どうしてあの畑だけ作物が良くできないのだろう。何かあるのではないだろうか」と話し合っていました。後からこの畑を作っていた人は大層信仰心の厚い人でしたので、毎朝必ず神棚と仏壇にお参りをしていました。また、畑でとれたものは、先ず一番始めに神棚と仏壇にお供えてお礼を言ってからとり入れをするのがならわしでした。

ある日、畑を耕していると鍬の先にカチンと固い物がぶつかり手がしびれる程ひびきました。「おおいたい。えらい固い物のようだかなんだろう。

きつと大きな石があるのだろう」と言いながら、そのあたりを掘ってみると石碑のようなのが埋まっています。



東神社記念之碑

この人は大層おどろき、「これは昔、誰かがお祀りしていたものにかいない。今まで土の中に埋まっていた、そのことを知らずにその上を畑にしていたのはいけないことだ」と思い一生懸命に掘り出しました。

どろまみれになったいくつかの石が畑の中から出てきましたので、村人に相談してその人の畑の少し高い所にとりあえず建てましたが、その人は自分の祖先を祀るように毎年毎年お祭りをしました。

それからは今までと違って大変良い作がとれるようになりました。

また何十年かたちました。そんな昔話はみんな忘れてしまいました。昭和二十八年に山本市英市長さんが、「この石碑は昔、道路工事をした時の竣功記念碑であるから、その人の土地に建てておくのもつたいないことだ」と、東神社の境内にあらたに立派に建て直して盛大なお祭りをして、工事に苦勞した人々に感謝をしその霊を慰め、みんな毎年お祭りをすることになりました。石碑には『記念之碑』と刻まれてあります。建設の年月はうすれて読み取れませんが、明治の初めに建てられたものといわれています。

#### 《参考》

- ・ 岩見沢の開村は明治十七年十月六日です。岩見沢と幌内との間の道路は明治十一年につくられました。幌内炭鉱の開坑は明治十二年一月です。

# 野にかえったわらび

寒い冬も春の彼岸(春分の日)が

過ぎると一日一日とだんだん

暖かくなってきました。そして、

山などに少し雪が残っていますが、

原野の方は雪がすっかりとけて草

が芽を出し、ヒバリが空高くまい

上がりさえずり始めました。



もうすっかり春になりました。仙吉たちは畑仕事の合間をみて、ワラビ採りに出掛けることが多くなりました。ワラビはあくが強く苦くてそのままでは食べられないので、採ったその日のうちになるべく早く、木灰か重曹を入れたお湯で湯がいたあと一晩水にさらして苦みを抜きます。苦みの抜けたワラビはおひたしにしたり、油いためにしたりして食べるほかは、塩づけにして保存食として夏から秋、そしてお正月に食べるようにしていました。しかし、採ってくるワラビはどんなにたくさん原野にあっても、その家でその日のうちに湯がくだけしか採らないのが決まりだったのです。それは、あまりたくさん採って

ると、その日のうちに湯がくことができなくなり、採ったまま一日湯がかずにおくと、三寸(九センチ) 帰るといわれるほど根元の方から固くなり苦みを増して食べられなくなります。

そのことを村の人々は、『ワラビは野にかえる』と言っていました。

仙吉たちは、いつも食べられるだけずつ採ってきていました。

ところが、となり部落の欲の深い甚吉は、山に行き藪を見つけるとあるだけ全部採ってきました。また、タランボの芽も何回も出掛けて全部採ってしまうので、甚吉が採って歩いた所のタランボの木はいつか枯れてしまいました。その甚吉が馬車を仕立ててワラビ採りに出掛けました。そして、よい場所を見つけると鎌で刈るようにはじからすつかり刈り取って帰ってきました。そして、大きな鉄鍋に湯を沸かし採ってきたワラビをどんどん湯がいていましたが、あまりたくさんなので半分も湯がくことができません。

「あとは明日湯がこう」と庭先にそのまま積んで置きました。

夜中を過ぎますと甚吉がワラビを刈った原野のワラビの神さまが様子を見に来て、山と積まれたままのワラビを見て怒りました。

「食べもしないのに刈り取って庭先にそのまま山積みしておく村人はごらしめなければならぬ。明日になったら湯がいても干しても漬けても食べられないように、固くなるだけでなく食べたら口の中が苦くて舌がよじれるようになれ」と言って帰って行きました。

翌朝、甚吉が起きて、また鉄鍋に湯を沸かして残ったワラビを湯がきましたが、今度はいくら湯がいても軟らかくなりません。一本とってかじってみると口中が苦くて苦くて思わず吐き出しました。

急いで井戸水で口をすすぎましたがなかなか苦みがとれません。

甚吉は、たくさん採ってきたワラビのほとんどを捨てなければなりませんでした。それから甚吉も、その日のうちに湯がくだけしか採らないようになったので、仙吉たちはいつもおいしい山菜をたべられるようになったといえます。

#### 《参考》

ワラビはあくが強いので採ったその日のうちになるべく早く、木灰か重曹を入れた湯でゆがいたあと水にさらします。採ったまま一日おくと三寸（九センチ）帰るといわれる程、根元の方から固くなり、苦みが増して食べられなくなります。

ワラビの発ガン性について酪農学園大学の牛島先生は、「モルモットと人間は別です」と言われ、「この発ガン性物質は、アルカリや熱に弱く、水に溶けやすいので、重曹などを入れた湯で十分あく抜きをした水にさらすなど下処理に注意すれば、かなり分解されたり抜けたりします」と言われ、心配はなさそうです。

原野に多く自生し、大願町には『わらびが丘』という国鉄バスの停留所がありました。

## 鶴沼物語

毎年毎年、渡り鳥が

やって来て休息する沼が

ありました。ある鳥は南

からやって来て北に帰り、

ある鳥は北からやって来て

南へ去って行きます。

ある年の春のことです。

南の越冬地から北の国へ帰る途中の鶴が群をなして飛んできて、この沼の畔に舞い降りました。村人たちにとっては初めてのことなので驚きながら集まって見に行きました。たくさん鶴はまるく囲みをついています。どうやらその中にケガをした鶴がいるようでした。

鶴たちは村人に向かって盛んに鳴きだしました。集まった村人の中に幸太というたいそう小鳥の好きな少年がいました。

幸太は、鶴が助けを求めているのだということがわかりました。

「安心して飛んで行けや。ケガをした鶴は俺が助けて飼っておいでやるからなあ」と大きな声で叫びました。





すると鶴たちは、一斉に飛び立ち空の上で二度、三度と円をかいいて鳴きながら北の方へ飛んで行きました。後には幸太がいう通り一羽の大きな鶴がバタバタと飛べずに苦しんでいました。幸太が走り寄って取り押さえ、村人たちに手伝ってもらって連れ帰り、近くの沼のあたりに小屋を作り、そこでケガの手当をしてやりました。

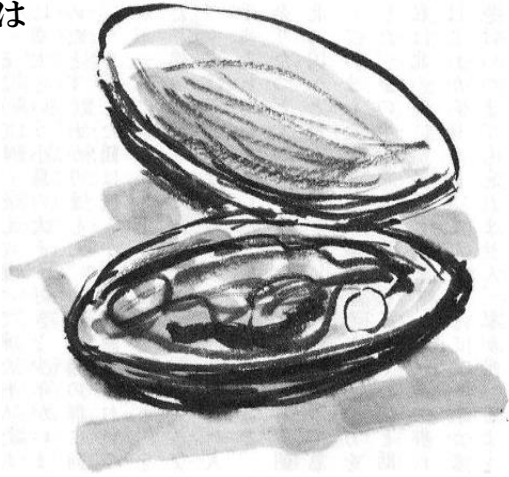
鶴は十日もするとすっかり元気になりました。そして、ある朝早く幸太たちに見送られて、ただ一羽北の国に飛んで行きました。

幸太は手当をした鶴がいなくなると急に淋しくなり、今まで鶴のいた小屋に行つて見ました。中はきれいになっています。腰を下ろして沼の方を眺めているうちに、幸太は眠ってしまったのです。

夢の中で幸太は、キズついた鶴の手当をしていました。幸太はその鶴と話をしていました。

「このキズがなおったら、私は北の国に帰ります。私はあの群の先頭の鶴なのです。しかし、あの群れはもうきつといつもの場所まで飛んで行ったでしょう。私はこれから後を追って行かなければなりません。」

村人に受けたこの恩を私どもは



けつして忘れません。幸太さんのお蔭で私はまた飛べるようになったのです。本当にありがとうございます。お礼にこの沼に棲むカラス貝にきれいな真珠を入れておきましょう。真珠が出たらそれは私どものお礼だと思つてください」と言いました。

そこまで聞くと幸太は目が覚めました。

「不思議な夢をみた」と幸太は村人に話しました。

村人は沼の中から幾つかのカラス貝を採り、中を割ってみると本当に真珠が入っているではありませんか。村人は大喜びして少しずつカラス貝の真珠を採ることに決めました。そして、この沼を鶴沼と呼ぶことにしました。

その後、石狩川の洪水で耕地が流されてしまい、村人たちはどこかへ移り住んでしまいました。そして、村人がいなくなつてから何十年も過ぎました。いつしか鶴も渡つて来なくなり、鶴沼と呼ばれていた沼もどこであった分からなくなつてしまいました。

鶴沼は石狩川の洪水でつくられた河跡湖の一つであつたと思われませんが、その後の洪水で鶴沼はなくなつてしまったのかも知れません。

# 御茶の水の水

岩見沢のあたりは、一万年ほど昔は海であったらうといわれています。地勢の僅かな動き、噴火灰の堆積、草や木の積み重ね、河川が運んできた土砂などが何百年も何千年も続いて今のような地形に近いものになったといわれています。開拓に入った人々は、なるべく小高い土地で稔りの良い、水の便利な場所を求めて家を建てて住んでいました。しかし、原野の方は泥炭地帯ですので水があっても赤い泥炭水でとても飲めるような水ではありません。どこを掘ってもすぐ水が湧き出ますが、どれも、どの井戸も赤いかなげ臭い水でした。半日も桶にとって置くと油が浮いてくるような水でした。

人々は、雨が降るとたらいや桶を出して雨水を溜め大切に使いました。たくさんの開拓者が入らなければ土地は拓けません。しかし、水がなくしては開拓に入ってくる人がいないのです。早く開拓に入った人の中で権四郎という



人は、「何とか良い水のある場所を」と捜して、あちこちと土地の様子も調べてみました。毎日畑の仕事終わると水捜しの仕事をし、夜は調べた場所を基として図面を作りました。

もともと神様や祖先を敬う立派な人であったので、毎朝神仏に一日の幸福を祈り、夕方には一日の無事を感謝しました。

ある晩、権四郎が図面を作りながら、つい昼間の疲れでうたた寝をしました。その時、夢の中で神様と仏様が話をしているのが聞こえてきたのです。

「自分だけでなく部落のため

に熱心に水を捜しているが、

水は低い所だからあると

いうものでもない。裏の沼

から百間（一八〇メートル）

ほど川寄りの真土の高台あ

たりが先ず第一だらう」

「左様、左様。しかし、そこ

一か所では外の者も困らうから、

いつそ東から西に一本水みちをつけようかのう」

「それが良い。それが良い」というところで権四郎は目を覚まし、神棚や仏壇に供えた灯火（おあかり）も線香も、今燃え切ったと



ころのようでした。権四郎はあらためて神棚と仏前にお礼をいうと真夜中にもかかわらず家中の者を起こして、夢に見た場所に行き掘ってみると、そう深く掘らないうちに水が湧いてきました。

権四郎は喜んで幾度もその水を手にすくい上げました。

翌朝行ってみますと、それはそれは澄んだきれいな水がこんこんと湧き出ているではありませんか。人々は、「こんな良い水でお茶を入れたなら本当に美味しいお茶が飲めるだろう」と言い、それから御茶の水という名の部落になったといっています。

## つじうら売りの爺さん

今では考えられないような商売がありました。その商売の中に『つじうら売り』という商売があったのです。今でも神社やお寺にお詣りした時に、「大吉が当たりますように」と祈りながらいただくおみくじがあります。そのおみくじと同じようなおみくじを売って歩く商売があったのです。そのつじうらを買って火鉢の火の上にかざすと白い紙に文字がうき出てくるのです。

そうしたつじうら売りをして歩いてきたお爺さんがいました。

秋もおそくなつて、夕方からはおもてに出ると少し寒くなる季節に

なると、どこからか岩見沢にやってくるのでした。そして、つじうら売りの爺さんは毎年必ず市街の西の方にある安宿にとまることにしていました。昼は造花を作って売り歩き、夜はつじうらを売って歩くのが毎日でした。色の黒い背のあまり

高くない、貧相なやせがた

の爺さんは、いつも頭から

スッポリとダルママントを

かぶると、自分で作った

つじうらをふところの街に出て行くのです。

一条から二条、三條から四條、五條と、街中を売り歩くのでした。

♪「商売繁昌判る恋のつじうら。運勢判断判る恋のつじうら」

爺さんの呼びかたには一種特別な節回しがありました。

どんな風の吹く夜でも、どんなに雨が降る夜でも爺さんはダルママントをスッポリとかぶり街の中を呼び歩くのでした。そして雪が降りはじめ、もうじき正月がくる頃になると、フツと街から姿を消してしまうのでした。爺さんの生まれ故郷がどこなのか、どこから来てどこへ行くのか、親類があるのか、どんな仕事をしているのか誰も知りません。ただ秋になるとどこから来て、毎晩街の中を「商売繁昌判る恋のつじうら。運勢判断判る恋のつじうら」と、おみくじを売って歩いてきたお爺さんが、その年は秋になつても姿を見せませんでした。



街の人々は、つじうら売りの爺さんのことなど思い出してはいませんでした。そうして何年かたったある秋の風の強い夜どこからか、「商売繁昌判る恋のつじうら。運勢判断判る恋のつじうら」と、売り歩く爺さんの声を聞いたという人が何人かいました。街の人が集まった所では、必ずこのつじうら売りの爺さんの話が出ました。しかし、その人たちも不思議にはつきりとその日を覚えていないのです。また、つじうら売りの爺さんの姿も見えていないのです。

丁度その頃、爺さんがよくとまる宿屋がとりこわされて別な新しい店にかわるようになっていました。けれども人々は確かにつじうら売りの爺さんの声にまちがいが無いと言いつけていたのです。爺さんのことについては、名前も生まれも故郷も何も判っていません。

ただ爺さんが、「商売繁昌判る恋のつじうら。運勢判断判る恋のつじうら」という触れ歩いた声だけが人々の記憶に残っているだけでした。今でも秋のそれも雨の降りそうな曇った風の強い晩に、じっと耳をすませていると、「商売繁昌判る恋のつじうら。運勢判断判る恋のつじうら」という爺さんの声が西の方から、かすかに悲しそうに聞こえてくるといいます。

## 馬の背

何千年も昔から流れている幾春別川は、その頃は川底まで見える程きれいな流れでした。しかし、雨が降ると一度に水かさが増して、ごうごうと音をたてて流れます。そして、

雨が止むとすぐに川の水も少なくなり夏などは本当に川底の方を少しばかり流れているだけでした。それでもこの川だけは、橋か渡し舟以外には向こう岸に渡ることは止められていたのです。

それはどうかするとズブズブとぬかつて、見るまに川底に沈んでいくことがあるからです。

今の岡山橋のすぐ上手にアーチ形の



旧岡山橋

鉄橋が架かっています。これは昭和十一年に岩見沢に初めて架けられた人道の鉄橋で工事費が八万円といわれています。昔はこの川には橋が架かっていませんでした。岡山橋のところも元右エ門の渡しといっていたのです。三笠の方に行く旅人や美唄の方に行く旅人はもちろん、

川向に畑を作っている農家の人も馬もみんな、この元右エ門の渡し舟に乗って川を越したのです。

ある日照りの続いた年でした。幾春別川の水は本当に少なくなり、川幅もいつもの半分位になり、どうかすると渡し舟の底がつかえてギシギシとなるほど川の水が少なくなっていました。それでも人々は昔からの言い伝えを守って誰ひとり歩いて川を渡る者は居りませんでした。ある日のことです。駄鞍をつけた馬を引いてきた馬夫が川岸で舟の来るまで一休みしながらこの話を聞いていて、

「何だこんな狭い川、それに川の水もほんの少しではないか。俺らは舟に乗らずにこの馬に乗って川を越すぞ」と皆の止めるのも聴かずに川岸に下りてゆきました。そして鞍の上に乗ると馬をザブザブと川の中に入れたのです。

上から見ると川底は良く見えます。ちょうど中ほどにかかった頃、馬は急いな鳴くと後ろの方が半分くらい沈みかかっています。舟待ちをしていた人々は、

「それ、大変だ」とばかり助けに走って行きましたが、どうすることもできません。見る見るうちに馬は沈んでしまいました。



船着場跡

あとは荷物が二つ、三つ浮かんでいるばかりでした。人々はこれを『馬の背』と呼んで恐れていました。

それは馬の背も立たないほど、深く沈むからだといわれていました。

#### 《参考》

・三笠市は、以前は三笠山村といい、それ以前は市来知村、幌内村、幾春別村に分かれていました。また、美唄市は沼貝村と称していました。

## 大木になった杖の木

つえ

その頃の岩見沢は、空知の中心とはいえ、まだまだ今のように開けてはいませんでした。それでも官庁があつて鉄道が通り、札幌通り、夕張通り、室蘭通りなど国道の起点となり、商店がならび旅館があるなどなかなか賑わいのあるまちでした。しかし、まちはずれから先はもういなか道で、馬車が一台通れる位の道幅しかありません。

隣部落に行くにも、人も馬車もめつたに通らないようなほこりだらけの道を歩いて行かなければなりません。今のようにバスもハイヤーもない時代ですからみんな歩いて行くのでした。そんな時、まちはずれに一人のお坊さんがいました。本場で仏教の勉強をして、僧侶の資格のほかに学校の先生の免状も持っている大層学問をした

人で、本山からこの地方の布教のためにといわれて来たのでした。

お坊さんは、毎日村人たちに仏の道を教え諭しました。時には貧しい人々のために義捐の托鉢に歩いたこともありました。

こうした時に、必ず木や草の大切なことを教えたのです。

「家を一軒建てるにはたくさん木材がいるが、その木材になる木を育てるには五十年、百年もの年月がかかる。橋を架ける時の桁にしても、橋杭にしても同じことだ。

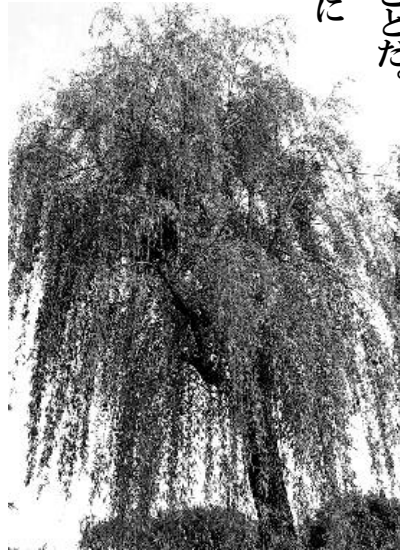
みなぞうしたものの恵に

よつて人々の暮らしがで  
きるのであるから、たか  
が一本の庭木であつて  
も大切に育てることに

よつて、人と木との間に

言葉にならない心と心が通じ合うようになって、木を大切にする人には必ず良いむくいがある」と説いていました。

そんなある時、遠い炭山の方の測量を終った人々がまちに戻ってきました。疲れた人々はどこかで木の枝を折って杖にしてきた人もいました。宿につくと今まで杖にして助けてもらった枝などは道ばたにほうり捨ててしまいました。翌日そこを通りかかったお坊さんはその枝を見て、「これはかわそうなことをしたのう。こんな道ばたに捨てて



はならん。どれ集めて片付けて進ぜよう」と、ちらかった木を集めましたところ、中に柳の枝がありました。

「おお。この杖にした木は柳だのう。まだそんなに傷んでいないからきつと根付くであろう。どれ私が挿し木をしてやろう」と言つて、捨てていった枝の中から柳の木を取り出して、根付きやすくするために少し手を加えて、まち角にズブリと挿し込み、ありがたいお経をとなえて帰って行きました。十日たち、二十日たち、一月と日が過ぎますと、その挿し木から新しい芽が出て、その年には少しは小枝もできました。一年、三年、五年と月日は早々と過ぎて行きました。

いつかまち角の柳の挿し木はもう立派な木となつて、しだれた細い枝が夏風にゆれ、まちの人たちのよい夕涼みの場所になりました。

挿し木をした時、家もなかったその場所は今はまちの中心となりましたが、柳の木はまちの人々に大切に育てられています。

#### 《参考》

・このお坊さんは前田正範師です。社会福祉事業に挺身され、町会議員、市議會議員として町政、市政のためにつくっておられました。

・前田老師が挿した柳の杖は、当時、昭和炭鋌(沼田町)の調査に入山した矢野貞三技師の一行が杖にしてきたものでした。この調査班には外人技師が四人もいたそうです。大木になった挿し木は、市内七条西五丁目、旧北海タイムス支社の角にある柳です。

# みじかくなつた親指

おやゆび

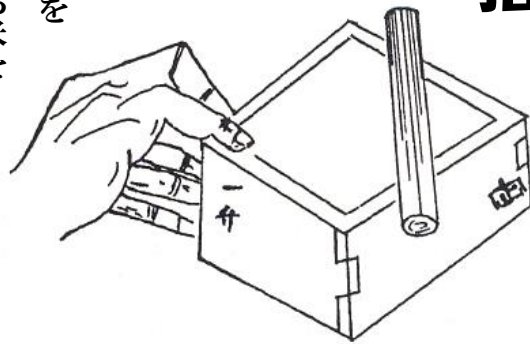
開拓当時は、お米も麦も大層値段の高い食べ物でした。普通の家では、お米ばかり炊いて食べることもなかなかできません。いもやカボチャ、大根などに麦やお米を少しまぜて食べることが多かったのです。それでも少しづつお米を入れたご飯を

炊いていましたから、町の人々はお店からお米を買っていましたし、農家の人はその商店にお米を売っていたのでした。

そうしたお店の中に一軒だけ大層ずるい店がありました。

その頃は、お米を買うにも売るにも必ずマスで計るのです。

ずるい店ではそのマスで計る時に、買うときはお米をマスに入れると一番おしまいにトン、トンと親指でマスのふちをたたいてからマス棒を上をならすのでした。また、売る時はマスの中に親指を入れてマスを持ちマス棒を使うのです。ですから、買う時はトン、トンとたたくと少しお米がよけいに入りますし、売る時にマスの中に親指を入れるのでその分だけお米が少なくなることになります。



毎日毎日、その店ではこうして商売をしていましたので、親指の分だけよけいにもうかっていた。こうして商売をしているうちに、いつからかマスの中に入れる左の親指がだんだん小さく短くなってきました。別に痛くもありません。お医者さんに診てもらいましたがさっぱりわかりません。そのうちに半分程に短くなってきました。すると今度は、右の親指もだんだん短くなってきました。

人々は次第にその店に買物に行かなくなり、いつかその店もなくなつてしまいました。村の人々は、あの店の人の親指はお米を計る時にマスの中に入れていたので、お米の神様や麦の神様がこらしめるために、指を短くしたのだらうと言っていました。

## 《参考》

- ・今は米や麦は重さで計っていますが、昔は五合マス、一升マス、一斗マスで計っていました。一斗マスには約十五キロの米が入り、四斗(六〇キロ)で一俵(一俵)といました。
- ・マスの上に金具がついているのは穀用といつて米、麦、豆など穀物を計るマスです。金のついていないマスは液用といつて、酒、油、醤油、酢などを計るマスで区別されていました。

はしひめ

## 橋姫さまのお話

「橋姫さまのお話をしやろうかなあー」と、仙吉のおばあさんが孫たちに言っていました。

「橋姫さまってどんなお姫さまなの」

「橋姫さまはなあー。橋を守る神さまだよ」

おばあさんは、豆を選びながら話を始めました。

「それは、それはずつと昔のことだった。道路といつても原始林の中をただ大きな木を切り倒し、背丈より高い根まがり竹を切つて片よせしたのが道路だった。小さな川には二、三本の大きな木を丸太のまんま岸から岸にかけ渡してあるのが橋だったし、大きな幾春別川や幌向川には特別に渡し舟があったけれど、どこにもあるわけがないので、そんな時には向こうに渡るのにずいぶん回り道をしたものだった。そんな大きな川でも水の少ない時には、兩岸から丸太を切り倒して渡っていたが、そんな丸太橋は、ちよつと雨が降ると流れてしまうので、村人たちは立派な橋を架けたいものだど相談をしたんだよ。何回も何回も相談したあとで、いよいよ橋を架けることに話がまとまって、



村の人々は、みんな力を合わせて工事をすることになったのだよ。

工事の前にみんなは、土を盛り御幣を祀り、無事を祈つたのだよ」

「へいつてなんなの」

「へいというのは神様が悪魔を祓うもので、これくらいの木に紙垂をつけたものだよ。神社でお参りをする時にお祓いをするじやろうが、あの時のお祓いがそうだよ」

「そこでいよいよ工事が始まつたんだね」

「そうじゃ。工事が始まつてなあー。木を切り出す人、道路を新しくつけかえる人、土を運ぶ人、土留杭を打ち込む人など毎日毎日忙しい日が続いて、そのうちに川の中に橋杭を打つことになつてなあー。」

「男も女もドンツキ唄にあわせて綱を引いたのう。エンヤコラヤのヤーイ、ドン、モヒトツオマケにヤーイ、ドンと声をあわせてなあー。」

お陰で三か所の橋杭打ちも終つていよいよ桁を渡すことになつて、その桁も橋杭の上でつきあわされて向こう岸まで届いたんだよ。

『さあ。もう少しでできるぞ、あとわずかになつたなあー』

『これまでできたら、もうでき上がったも同じことだ』

『おいら一つ、桁を渡つて向う岸まで渡るべー』と、何人かが桁の上を、スイスイと上手に渡つたんだよ。

『渡つた。渡つた。明日からは丸太敷だ』と言つて村人たちが喜んで家に帰つたその晩から、大雨となつてなあー。翌朝村人たちが心配して



集まつて来たが、その時はまだ川水も半分位までしか増えていなかった。『これで雨が止んでくれたら大丈夫だ』とみんな家に帰ったが、雨は一向に止まず翌日もまた雨降りだった。今度は川水はずっと岸上の方まで増えて、にこつた泥水がドウドウと音をたて、時々大きな木がドンドン流れてきて橋杭にドシンとぶつかるので、その夜とうとう橋杭もろともせつかく渡した桁もみんな流れてしまったのだよ。

村人たちはガツカリしたが、みんな何としても橋が欲しいので、また工事をすることになってなあー。今度は、前以上に長い木を橋杭に使いたい桁をかけたところ、その晩からまた雨が降ってきたので、村人たちは今度は大水でも流れないようにと、太い綱で岸の大きな木にしぼりつけたがやはり翌朝にはその綱が切れて流れてしもうた。

『どうしたものだらう。何かタタリがあるのではないだらうか』  
『昔から橋をつくる時には、人柱をたてるという話があるが、ここもそうせにやならんのだらうか』などと噂をしていたそうな。

そんな時、『タタリなんぞあるはずはない。だが昔から橋の工事をし  
て橋ができた時にはお礼にお宮を作ってお祀りをするということだから、今度は先にお宮を作ってお願いをしたらよいではないか』と、ある老人が言ったので、『それはよいことだ』と村人たちは、でき上がる橋のそばの広場にお宮を作り、お祀りをして無事に橋ができるのを願  
いしたのだよ。さて、三度目の工事が始まると、毎朝みんながそのお

宮にお願いをしてから仕事をし、仕事が終わると一日のお礼をして、帰る時には畑からとれた野菜を供えたり、ある時は果物や餅などもお供えしたこともあったとな。そのうちに橋杭打ちも終わり桁も渡し、『神様、今度こそ橋ができますようにお願いします』と、みんながお願いで帰ったが、村の何人かが心配のあまり夜中に川の様子を見に来たのだよ。すると、お宮の前に美しいお姫さまが立って、今日渡した橋桁の上を向こう岸に歩いて行ったそうな。

そして、今度は向こう岸から渡つてくると、スウーとお宮の中に入つて行ったそうだよ。見ていた村人たちはビックリして思わず土の上に座り込んでお宮の方を拜んだのだよ。この話を聞いた村人たちは、神様がお守りして下さったからもう大丈夫だと一生懸命に精を出して働いたので立派な橋ができ上がったのだよ。それからは、そのお宮を橋姫さまのお宮といつて、みんなが毎日お参りに行くようになったというぞい。今でもなあー。あちこちの橋のたもとに小さなお宮があつて、そのお宮のお姫さまが橋を守っているのじゃから、お宮にお参りしてから橋を渡るのだよ』とおばあさんが子どもたちに話していました。





かいたくついでそう

## 開拓追想ばなし

明治十七年か十八年にかけて岩見沢への移住が始まりました。父は先に移住した親類の話から将来の成功を夢みて、明治二十八年春、出生地を後に名古屋駅を出発したのでした。

品川港より船に乗り室蘭へ上陸し、更に汽車に乗り岩見沢で下車、十五日ほど知人宅で世話になり、入植先を岩見沢村幌向一線東八番地に決め、近所の人などの力を借りて掘立小屋を建てましたが、屋根をふく草はなく、やむを得ず岩見沢から柵屋を頼み、小屋の側は木を割つて板のようにした六分(一センチ八ミリ)厚さのものを一枚、一枚縦に並べただけのものでした。そのため、食事をしながら星を眺められるし、冬になれば吹雪の日などは、ふとんの上に雪が十五センチ位も積もることもめずらしくなかったのです。

十歳で移り住んだ当時は友だちはなく、日がたつと近所で年長の友だちが親切に遊んでくれました。でも言葉の通じないには実に困りました。私だけでなく相手も困った様子でした。私は次々と分家して行く兄弟を見ながら父母と共に開墾に従事してきました。

よく「北海道の農民は米など食べては暮らされぬ」と先住者から聞かされていたので、あわ、きびなどを世話してもらいましたが、食べつけぬもの故、両親は絶対食わず、やむを得ず幌向市街へ行き、米一俵、麦一俵、青えんどう一俵などを手に入れ毎日の糧にしました。

米一俵(四斗、六〇キログラム)といつても、道中で抜きとられ引取った時は三斗七升(約五十六キログラム)しか量がありません。お汁の実は、山ぶき、アシナ、タンポポ、オオバコ、赤ダモのきのこ、後にさや豆、ばれいしも穫れ不自由はしませんでした。

それまで熊と出会ったことはありませんでしたが、旧曆九月十五日日夜のことでした。隣の池田さんと部落の集まりに行き、私は池田さんの後について行きました。池田さんは、急に立ち上がり振りむいて、「アンチャンよ、向こうを見ろ、あれは人ではないようだぞ」と言うので自分も月の明かりをすかして見ると、なるほど人ではないようです。そこで道端の切株でやすみ、向こうの動くのを待つことにしました。

しかし、少しも動く気配はなく、進退極まり、五、六服もタバコを吸い、つい大きな音を立ててしまい、その



音で向こうの物影が動くように見え、池田さんが、「アンチヤン、動くようだが行くのか、来るのか」と問われたが、私にもはつきりわからず、二人で見守っているうちに人家の陰になつて見えなくなつたので、ほつとして歩き出したのです。やはり熊で、畑のきびはめちやくちやで大鍋ほどの足あとは幾春別川を渡り川向こうへ行つた様子で、急いで帰り馬に被害がなかつたことを何よりも喜び合いました。

一年のうちでお盆を何より楽しみにしていましたが、入植当時は洪水が多く、そのため床上に更に高く板を敷き、二重の床を張り狭い所で風吹くたびに打ち寄せる水の上で、三日二晩仮の宿、水は引けども日は待たずで、水の中でお盆は過ぎてしまいい後始末が大変でした。また、入植当時は新地のため作物に害虫が大発生し、丹精込めた作物は食べつくされ、道端の雑草まで食べ、道を歩くと虫をブツブツと踏みつぶし気持ちが悪いく、今思い出してもゾッとします。何しろ農薬がなく自然に任せておくより仕方がなかつたからです。開拓をしながら熊、害虫、洪水、冬の積雪、日常の飲料水のことなど苦労した話は忘れられません。

『空知のむかし話』空知の民話シリーズ第二集

昭和五十九年三月竹島六三郎回想記より

## 万字線の開通

開拓当時、この空知地方には幌内、夕張を始めとする有望な炭田が多くあり、栗沢村万字炭鉱はそのうちの

一つで、明治三十八年十一月、所有者である朝吹英二さんによつて開鉱され、家紋が卍であつたので、万字鉱とよばれていました。当時は鉄道がなかつたので、

万字鉱の石炭は空中にかけ渡した鋼線（ワイヤー）に運搬器をつるし夕張炭鉱へ

運び、更に鉄道貨車で室蘭や小樽へ運んでいました。また、沿線には森林が豊富にあつたので、明治四十年軌道線路が志文と美流渡滝の上間に敷かれ、馬車鉄道によつて材木を運んでおりました。

その後、美流渡地区、滝の上地区にも石炭が埋蔵されていることが分かりましたが、なにしろ志文から万字炭山までの間は、幌向川の上流で断がい絶壁の所が多く、人馬の通行もままならぬ地形でした。

明治四十三年、軽便鉄道法が公布されこの地方でも明治四十五年



七月から測量を始め、途中断がい絶壁の間を通過するため、慎重調査を要するとして降雪期は中止し、精細な調査は大正二年、融雪を待つて行われ工事に着手されました。

この工事がどのように行われたのでしょうか。当時の記録によりまずと全線を三工事区に分け、それぞれ業者に受け持たせました。

敷設に必要な石材及び砂は付近で得ることができず、石材は登別より、砂利や砂は由仁、張碓、幌別方面から取りよせ、資材貨車が志文の停車場にたくさん止まっています。

特にこの工事に要する資材の運搬には苦勞し、積雪結氷期に馬そりて工事現場へ運びましたが、一番遠い第三工事区は馬そりによる運搬は費用がかかり過ぎるので、第一、第二工事区の土盛工事や橋梁ができるのを待つて、降雪前に美流渡駅まで仮線路を延ばし資材汽車を仕立て輸送、それより先は幌向川の結氷を待つて馬そりて水上運搬や道路に出て、また水上を運ぶなどして行われました。

この第三工事区は一番困難を要した所で、志文より約十二キロ付近の線路は高い築堤や深い切り取り工事が交互にあり、幌向川は山脚に迫って断がいをなしているので、三百六十メートルの間は石垣を川の中に築造し、川幅を拡げるため対岸を拡張し、線路と道路を造り、また湧水で崩落を防ぐための幌向川の切りかえ工事なども行わなければなりません。一番高い鉄橋は橋脚が二十四・八メ

ートルもあり、川の合流点でもあったので鉄筋を差し込んで入念に仕上げをしました。このように万字線は、総額百二十三万八百五十二円二十銭四厘の巨費で大正三年十一月十一日、志文と万字炭山間約二十三・八キロが開通し、当時の新聞は、『万字鉄道開通十五哩の経済活動を見よ』の見出しで万字線の使命が報道されました。

開通式には沿線の大人や生徒は国旗を

手に参加、来賓や初乗り客を乗せ一駅

ごとに開通式が行われ、夜には盛大な

祝賀会が催され、子どもたちの遊び

の中にも『開通式』がはやったとのこ

とです。こうして開業した万字線は

七十余年沿線の七鉦から産出され

た石炭を主に輸送して来ましたが、

万字炭鉦は昭和五十年八月末日の

大雨で抗が埋没し閉山、その他の炭鉦も相次いで閉山し、人口も急に

少なくなり運ぶ産物も減ってしまい、赤字ローカル線第一次廃止

対象線となり、昭和六十年三月末日をもって、万字線の歴史にピリオドが打たれることになりました。

『空知のむかし話』空知の民話シリーズ第三集

昭和六十年三月より



「昔のじい」

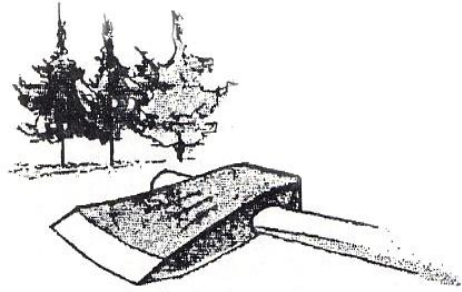
## 開拓最後の斧

おの

少年の頃、父の使いで近隣の部落に出されるときに、目的の家を示される方法として

開拓時代に残された大木や森が利用された。

その多くはアカダモの木であったようである。



東川向のどこそここの家は裏の幾春別川の川辺にアカダモの木が二本

あるとか、三笠山村の市来知の誰々の家は第一防風林をすぎて右手

の道路二本目を入ったところとか、その当時は古木や森が道標とし

て利用されていた。現在の岡山橋といっても、旧の太鼓橋は昭和九年

頃より鉄骨の橋となるため基礎工事が始められていた。この岡山橋の

ふもと岡山側に、開拓の名残りを止める大きなアカダモの木が一本

残されていて、樹齢数百年というものであった。わたしたちが五、六人

寄つて手を伸ばし抱えても余る根回りがあつて、高さは四十メートル

以上でなかったかと記憶している。とにかく当時高いものを計る物

尺のかわりに、「岡山橋のアカダモの木より高いか」ということが合言

葉の一つになり郷土の誇りとして近隣はもとより遠くの人たちにも

知られていたものである。

昭和十年の晩夏、このアカダモの木の下に三人の土族移住者が集ま

った。土族移住者の森下勝蔵(当時六十九歳)、一人は移住者二世の

岩田喜久馬(当時六十三歳)あと一人は同じく二世の松本静男(当時

五十四歳)日露戦争の勇士の三人で、いずれも明治十八年土族移住

により鳥取県より入植した一世と二世で、鳥取県の旧藩士であつた。

この三人の開拓者に託された使命は、岡山橋が永久橋に架け替

えられるに当たつて、国道の幅員を広げるために由緒あるアカダモの木

を倒さねばならなかつたので、大木を伐木できる経験者として、特に

アカダモの木に隣する関係から依頼された。

しかし、当時の若い人たちは大きな木を倒す術を知らなかつたので、

この三人の開拓者が選ばれたことは理由のあつたことである。

この三人の開拓者は明治十八年に移住した折、官給として与えら

れていた大鋸、大マサカリを持ち出していた。わけても几帳面な岩

田喜久馬は数日前から三人の大鋸の目立をし、大マサカリをとぎす

ませていた。大鋸と大マサカリの柄は幾十年も使つていながつた故でも

あるう、すつかりつやを失つていた。とぎすました大マサカリの刃が

暑い陽射しににぶい光を放つていた。

兄貴分の森下勝蔵がアカダモの根に腰をかけてぼつりと言つた。

「クサビを造つておかにや」

これを聞いて松本静男が「そうぞなあー」と腰鋸をとって、イタドリを分けて川辺に降り桑の木の大枝を切り取って来てナタでクサビをけずりながら、「岩田さんのナタは相変わらず切れるのう」とつぶやいた。クサビができあがると倒口の高さを二人で相談をし鋸目を入れる位置を推した。

「これを終ると先ず一服じゃ」と言つて、森下勝蔵が腰の煙草入れを抜く。岩田喜久馬もこれにならつて、きざみのつけ火を分けあつて美味そうに紫煙を流した。森下勝蔵がほつりとつぶやいた。

「このアカダモの木は俺らと共に生きて来たわい。惜しい木だが道路の邪魔になるなら仕方がないが、俺たちで倒すのは情けないなあ」と。するとほかの二人も無条件で、「ほんになあ」と同調した。

この三人にして見れば残念の一言に尽きるであろう。数十年の間、喜びにつけ悲しさにつけ最も手近にあるこのアカダモの木と共に過してきた、いわば三人の開拓者の分身といつてさしつかえなかつたのである。やがて岩田喜久馬が想念を打払うが如く立ち上がり得意のねじりはちまきをして一升びんの水を口にふくみ、とつた大鋸の持手にばつときりをふきかけ、「森下の兄貴やるけいに、このあたりか」と大鋸をアカダモの根に当てた。つられて立ち上がった森下勝蔵と松本静男が肩を並べて岩田喜久馬の当てた鋸の位置を見定める。岩田喜久馬は地下タビの足で足もとの雑草をふみつけ、たしかめながら半円

をえがくように大木に鋸目をつけていった。しばらくして、「かたいわい、かたいわい、鋸を受けつけんぜ」と息を切らしながらいうと、一番若い松本静男が、「岩田さん俺ら替わるけい」と岩田喜久馬の大鋸を引きつぐ。暑い陽射しと草いきれの木の根元で、松本静男が顔を真赤にしながら大鋸に力をいれてひいていた。ひき方ぶりの鋸ひきである。

息をきらしながら次々と替つて大鋸をひいていった。頃合をみて森下勝蔵が、「鋸はそこらでいいわい、マサカリ入れてみるけい」といつて鋸を止めた。ひと休みの後森下勝蔵が大マサカリをとつて足もとを踏みかため、「エイッ」と力の入ったかけ声を出して鋸目の上に打ちこんだ。カッンというかたい音がかえると同時に、黒いアカダモの皮が赤黄色の木肉をつけてとんだ。

一つ、二つとかけ声と共に木片が大木の根元に散つていった。

東に移住してから五十一年目、苦しい開拓の日々と開拓にかけたまざまな夢、土族移住者としての誇りもこのアカダモの木を倒すことによつてすべてが決算だ、

終わりだと思ひ切つた気持ち力が入ったかけ声にかわつた。

アカダモの大木の最後、開拓者の斧の終り、ふり上げる大マサカリの



刃が残暑の陽にキラリ、キラリと輝いていた。

現在旧橋となつている岡山橋が完成

したが、昭和十一年と記憶する。

当時この橋の架設費用は十二万円

と聞く。不景気時代の当時としては

正に大金であつた。昭和十一年秋

には、陸軍特別大演習が行われ

幾千の第七師団の将兵が、この岡

山橋を駆けぬけ砲車がごろ音を残

して去つた。

森下勝蔵は昭和二十八年十一月

十四日に八十七歳、松本静男は

昭和三十年六月九日に七十四歳、岩田喜久馬は昭和三十九年三月

十日に九十二歳をもつて、共に土族移住者として開拓した東と岡山

の地で永眠された。本年は岩見沢開基九十年、市制施行三十周年の

意義ある年である。往時を回想しご冥福を祈つてやみません。

昭和四十八年八月二十二日



旧岡山橋

## 「昔のこと」ある開拓者のイリュージョン

がんとん

# 明治十九年の元旦

明治十九年元旦、この日は土族

移住者にとつては定められた祝日

であり休日でもあつた。あのやか

ましい勸業さん原安五郎のこと

も今日ばかりは御役御免である。

原始林には朝もやが立ち込め、

まだらな土族移住者の家々は深い

雪に埋れ、炊煙が凍てついた空に静

かにたなびいていた。昨年五月入植

して以来、骨身を削る思いで切り拓いた土地は、未だやつと三反ばかり

り、隣家の小山家も冬枯れの原始林でも見透かすことができなかつた。

厳しい寒気に夜つびで薪を投げ入れて暖を採つていたのであつたが、

床板の合わせめから吹き上げる寒気と、板壁の節穴からの隙間風で、

荒ムシロの上に敷いてある布団の端々は真白に凍てついていた。旧鳥取

藩士岡伝三は寒さのため安眠できず、うつらうつらの浅い眠りから



元日を迎えた。妻のリウはすでに起き出て凍てついた水桶を炉端に置いて厚い氷を融かしながら、身づくろいする夫の伝三に、

「今朝はひどいしばれでなア」と話しかけた。伝三は「左様」とポツリ答え、木杓で融けはじめた水桶の水を汲んで口をすすぎ、

威儀を正し、板壁に貼りとめた藩祖池田侯の絵姿の下に柳行季を運び分厚い板をならべて供台をしつらえ、天朝さまから開拓の勞

を思召されて移住士族二百七十七戸に

賜った金子拾円の紙包みと、同じく賜った鮭の塩引き、それに御神酒を供え拍手

を打つて藩祖の恩、天朝さまの御保護による

開拓移住と今日までの経過を生ける人に対するように報告した。伝三の後には祖母の

タカと長男の高久、妻のリウが座していた。伝三は藩祖池田侯への報告を終えると家族に向き直り、「是が非でも、貸与された五千坪の開墾達成の決意を家族に」というより、むしろ自分自身に言い聞かせるように訓し終えた。この間、時間にすれば僅かな間であったが、裕

着にしみいる寒さは膝もとの感覚を失う程に厳しく、祖母のタカは生木の煙にむせいつて眼をふき鼻汁をかんだ。夫伝三の元旦の礼が終



ると、妻のリウは大きな鍋を自在鍵に掛け薪をさしくべて雑煮を温めた。雑煮は味噌あじで、だしは夏につれづれに釣って乾しておいた大きなウグイで、手作りの野菜が沢山切り込まれた勸業課思いやりの特配の餅が入っていた。

鍋を掛け終ると妻のリウは流し元に揃えておいた箱膳を、夫、長男、

祖母、自分の分と順に並べ、祖先伝来の朱塗りの木盃を先ず伝三に

さし御神酒を注いだ。伝三は忝け

なしとグウと一息に干すとこれを長男の高久の小さな手にとらし

た。盃は高久から祖母のタカに、

タカから妻のリウにと廻されて伝三の箱膳に戻つて伏せられた。

大きな碗に盛られた雑煮の湯気はふくやかに昇り渡道一年目の新年を寿いだ。高久は雑煮をフウフウ吹きさしながら餅を口に入れ、その度に「お母さま、餅はうまいのう」と飲びの声を揚げた。

平素無口な伝三もつりこまれてか、「有難いことじゃ、うまいだのう」と相槌を打った。

元旦の祝膳を終えた伝三はポロ切れの足まきを幾重にも巻き、





木綿のモモ引きの上で紐で止め、炉端に乾かしてあったツマゴをはき、黒くなった手拭いをかぶり、ボロ切れと藁で作ったテッカエシをはき、戸替りの荒ムシロをくぐって土間に立った。開拓の生業の習わしが確く身につけていて元日も休むことのできない。

妻のリウは流し元で食器の片づけにとりかかり、祖母のタカは高久を抱くように炉端に進んで、年末から続いて語り聞かせていた『山中鹿之助』の物語を始めた。リウが炉に薪を入れた。火の粉がパアッと薄暗い屋根裏に立ちのぼった。戸外に出た伝三は井戸の水を棒で掛声をかけて割っていた。朝陽は原始林を昇りきって雪に埋もれた移住者たちの家をいたわるように包みはじめていた。

## きつねのお産



その頃はどこにもお医者さんが居り

ませんでした。また、医者がいても今のようには、内科、外科、耳鼻咽喉科というように専門に分かれてもいませんでした。外科の先生でも、内科も小児科も眼科も何でも診てやりました。それと同じように、内科の医者も外科もやれば産科も診ました。

それはある月夜のことでした。いつもですとドンドンと病院の玄関の

戸をたたいたのですが、この時ばかりは中庭の方の縁側の戸をトン、トンとたたいた者がいました。医者が目をさました。「だれだ」と問いますと、「先生、先生。お産でカカアが苦しんでいます。産婆さんでは手におえないといひます。どうか助けてください」と言うのです。

「それは大変だ。どこの誰だ」と聞きますと、隣村の藤八だと言ひます。「藤八とは聞いたことがないがどのあたりだ」と問うと、森の先だと言ひます。「待つていろ。家が判らないから一緒にゆこう」と医者はお産の用意をして出てくると、病院の前に馬車が来ています。

それとばかり車に乗ると、前後に提灯を持った者がついて一緒に走り出しました。どこをどう通ったのか立派な門構えの家に入り、どうやらお産をすませましたが双子のお産でした。生まれた赤ん坊はどちらもうぶ声を上げませんが、二人とも元気でしたので、これはよかつたと思ひそれぞれ手当をやりました。

「先生、ありがとうございます。おかげ様でございました。どうぞこちらでお休みを」と、立派な料理でお酒をこちそうになつて、一杯のむと、夜中に起こされてお産の手当をしたので疲れが出たのか、ねむくて、ねむくてしようがありません。

「もう大丈夫なようだから帰るが、あとはこれこれしかじかの手当をして具合が悪いようなら明日病院に知らせに来なさい」と言うのと、

「先生のお帰りだ。早く用意をしてお送りを」と、来た時と同じよ

うに馬車に乗りますと、あつという間に病院に着きました。

ついてきた若者たちが「先生のお帰りです」と、病院の門を開けて「ありがとうございます」とお礼を言うなり、サアと帰って行き

ましたが、すぐ見えなくなり、よく考えてみると馬車の音もしなかつたようです。「不思議だなあ」と、思いながら家の中へ入って行くと、病院では、「真夜中に何も言わずに中庭から出かけると、後ろ姿もすぐ見えなくなった」と、大騒ぎをしている最中でした。

「先生さま。どこへ行かれたか」と、爺に問われても医者はただにが笑いをするばかりでした。

「いや、とても疲れた。休ませてくれ」と言うと、先生は床の中に入ると大きなびきをかいて寝てしまいました。

「先生は、きつねのお産を手伝いに行かれたそうなの」というわさがおきました。

それからは、村ざかいの森にある稲荷の祠は安産の神様になったといひます。

#### 《参考》

・ 医者は私(伊東博)の父のようです。

祖母と母と爺は、この話を信じていましたが、父は

何も申しませんでした。



はくりゆうじん

## 白龍神の通り道

開拓が進み、それまではソバや豆類、雑穀が作物の中心だった岩見沢でも、水田での米づくりができるようになった大正時代初めのお話です。市街地の西のはずれ、利根別川のほとりに何軒かの農家がありました。中でも佐藤さん、西尾さん、野尻さんらは一族で熱心に稲作に取り組んでいたのです。夏の短い北海道での米づくりは簡単なことではありませんでした。水田での稲作にいたっては、内地と同じように田植えをし美味しいお米をたくさん収穫するのが開拓者共通の目標でした。地域で水利組合を作り、代表者や役所の係が幾度となく道庁に足を運び、やっと利根別川せき止めの許可をもらって水門を造ったのは大正四年のことでした。

ところがこの水門、どうしたわけかしばしば底に穴が開くのです。そうになると田植えで忙しいときでも、草取りの最中でもとにかく穴をふさがなければなりません。俵に粘土を入れモッコで運んでは穴を埋める、一年に何度もそんなことがあつて皆は頭を抱えるばかりでした。二十年ほどたちました。相変わらず利根別川の水門は、地域の人々の悩みの種でした。そんなある日のこと、組合員の中に八大龍

王さんの信者がいて、教祖の石川センさんに相談したところ、「この川には白龍が住んでいて、水門の下に穴を開けて川を上ったり下ったりしている」というではありませんか。

「白龍様を祀り、皆さんでお参りをなさい。そうすれば白龍様は穴を開けなくなります」と教祖さんはおっしゃいました。

利根別川水利組合の人々はその話を聞いて、お宮を作ることになりました。昭和十二年、神社を新築して白龍様をお祀りしますと、その後水門に穴があくことはなくなりました。皆は春秋の祭りを欠かさず白龍様をあがめ、豊かな実りをお願いしていました。

やがて戦争が激しくなり、そして敗戦。食糧不足が深刻になると増産につぐ増産を求められ、水路の整備が必要になってきました。

昭和二十七年、利根別川は改修工事でポンプの揚水場がつくられ、これまでU字型だった川が中の島のある直線になりました。



白龍神社

工事に伴い白龍神社の移転が必要となり、現在の場所（九条西十四丁目）に移されたのです。当時は、美園一条と二条方面、西側は八条方面に用水路で水を流し水田に供給していました。

あたり一面見渡す限り水田で、秋ともなりますと稲穂が金色に波打つて、それはそれは美しい光景でした。

白龍神社が移転されてからも人々は豊かな実りに感謝して、毎年盛大なお祭りを続けておりました。お祭りの後の直会は、おもに野尻さん宅の納屋が会場でした。

清酒のない時代には、ドブロクを飲みながら、飲んで踊って日頃の疲れを癒しました。自動車などめつたに通らなかつた時代ですから、心ゆくまで楽しんで道端で寝入ってしまう人もあつたとか。

時は流れ白龍神社の周辺は、大型商業施設や住宅、マンションが立ち並ぶようになつてきました。昭和五十四年には、利根別川大改修川床下げ工事により、ポンプ場は取り壊され、護岸も整備されて、田園地帯の面影はすっかりなくなつてしまいました。それでも地域の人は白龍様に感謝してお堂を守つてきたのです。老朽化が激しくなつたお堂が新築されたのは平成三年のことです。九月九日、落成の式典が行われました。開拓時代から利根別川を悠々と行き来してきた白龍様は、様子の変わった岩見沢の川筋を上り下りしながら、今も豊かな実りを見守つてくださっているのかもしれない。

（西尾孝市 平成三年記す）

# ねている ゆび

北海道がこんなに開けたのは、本州各地から来た開拓移住の人々によるものです。開拓当時の官営移住者(開拓使が募集して申し出のあった中から決めた移住者のこと)には、開拓使が一戸について五千坪(約一、七ヘクタール)の土地を開墾するよう貸し付けました。

また、開拓を願いだした農場にも同じようにそれぞれ開墾の期限を定めて土地の貸し付けが行われました。そのどちらも期限までに開墾されていけば、検査をうけてその土地は開墾した人や農場の所有地になるのです。今の荒地おこし(新地おこし)とちがつて、その当時は二抱も三抱もある太い大きな木や、丈が十尺(三メートル)も十五尺(四、五メートル)もある、竹のような熊笹がビッシリとおい茂っていましたから、一歩その中に入ると、空を見ようと思つて上を向いても、木の枝や熊笹が茂つていて空を見ることができません。

また、足もとには何十年前に倒れたか知られない朽ちた木や野草がつみ重なつていて、どれ程掘つたら本当の土が出るのか分からないよ  
うな、それはそれはひどい原始林でした。このようなひどい原始林を  
鋸と鐮(たつき、はびろのような大きな手斧)山刃や鎌、鋏で切り

開いて畑にするのですから、その苦勞はととても考えられない程のなんぎなものでした。移住してきた人たちは、朝はまだ暗いうちに起きて僅かばかり切り開いてできた畑の手入れをし、明るくなると今度は大きな木を切り倒したり、熊笹を刈つたり切り倒した木は幾つにも切り割つて、「やつこらさ。やつこらさ」と、どうやら動かして何日も何日も天日にあててかわかしてから火をつけて燃やすのです。火をつけると、それはそれはすさまじいばかりの勢いで燃え続けてゆくのでした。ゴウ、ゴウとものすごい音をたてて、二日も三日も燃え続けていく

のでした。人々は夕食が終わつても

真っ暗になるまで働きました。

その上、月夜の晩は月の光を

たよりになおも働くのでした。

クタクタにつかれて家にもどつて、

あとはもうただ寝るだけです。

本当に着たままいろりのそばにごろりと横になつて、寝てしまふだけでした。そんな毎日が雨が降つても休まずに開墾の作業が続けられたのです。それはそれは大変な作業の毎日だったのです。

男も女も、子どもたちも、みんなが一生懸命に働いたお蔭で、今は



## スリッパ物語

立派な畑や水田となり、みんなが住む家々が建つ土地となったのですが、その当時は木を切ったり熊笹を刈ったりしたあと、木の根を掘ったりおこしたり熊笹の根を掘り出したりしてどうやら畑にし、そのほかに道普請の手伝いやら排水溝を掘って水の流れをよくしたり、時には橋をかけることもありました。そんなにも働くので体中が痛くなる毎日でした。夜寝てもゆっくり休まないうちに朝になります。

疲れた体を無理に起こして、さて畑に出て働こうと思っても手のゆびがよく動きません。

「ああ、今朝もまだゆびこが寝てるのか。おらは起きてるだぞ。」

「こら、ゆびこも起きろよと言いなから、親ゆびから人差しゆび、中ゆび、薬ゆび、そして小ゆびの順に一本、一本動かすと、やっと右と左のゆびが動くようになったものだよ」

とおばあさんが話してくれました。

「ほれ、みてこらんなあー。このゆびこが寝ていたもんだよ。今日は起きてるがなあー」

おばあさんのゆびは、ふしぶしが太くて、のぼしてもまっすぐにならず内側にまがつてがさがさになっていました。開拓当時の人々は、毎日、ねているゆびを起こして働いたのだそうです。

「おばあちゃん」

「なんだね」

「今、うちの前で工事をしているでしょう」

「そうさなあー。今度は道路もよくなるよなあ」

「いま、工事している道路の真中から長い木が何本も出てくるよ。」

あれは何なの？

「あれはなあー。スリッパだよ」

「スリッパって何なの？」

「鉄道線路の下に敷く枕木のことだよ」

「線路の枕木のこと？。それじゃ、うちの前は鉄道で汽車が走っていたの？」

「いんや。スリッパの上をおしちやんや

おばあちゃんが歩いたんだかなあ」

「どうして汽車が走らないでおいちや

んやおばあちゃんが歩いたの？」

「それはなあー」とおばあちゃんが話してくれました。



「遠いむかしの岩見沢はなあー、丘の上はよかったが原野の方は一万年程前は海だったという話じゃった。それで昔の海と陸との境目をなぎさの線というのだそうじゃよ」

「おばあちゃん、なぎさってなんなの？」

「それはなあー、波うちぎわのことだよ。岩見沢の市街はなあー、この波うちぎわから海の方がだんだん陸になったから、ほとんど泥炭の上でいたんに、川の水害すいがいの時の、泥や砂が積み重なかさってできた土地じゃったから、村ができて人々が入ってきた頃は市街の中に、流れのよくない小川がたくさんあったということだった。その中を切り開いて今の市街ができたのだから、今の四条の西十丁目から停車場まで行くのに、十三もの橋を渡ったというぞ。道路といってもただ両側に小さな溝みぞがあるだけで少し雨が降ると道路はグチャグチャのドロドロ道になったげな。

人々はみんな道普請みちふしんに力をつくしたけど、近くには砂利のある川もないじゃろうに。どうもならんかった。いつも寄り合いがあると、きつと道路のことが話になったというぞ。そのうちに道路に板を敷くようにしてはどうだろうということになってなあ。しかし、まち中の道路に板を敷くのは大変なことだが、それ以上よい工夫もないということで、そこで主おもだった村人たちが、丸太を何本かしばって道路に敷いたもんだ。ところで、雨の日はこの上を渡わたって歩いたもんだが、丸いのでどうも歩きづらいじゃろう。そこで丸太のかわりに、鉄道のレールの

下に敷く枕木スリッパを敷いてはどうだろうということになって、みんなで駅長さんさつきんにお願いに出掛けたんや。

駅長さんは偉い人でなあー。早速

何千本もの枕木をただで払い下はらげてくださったんじゃ。本当にありがたいことだった。村の人たちは喜んでその枕木を三本ずつしばって駅前からず

つと一条、二条、三条、札幌通り、

夕張通り、農学校通りと敷いたん

じゃよ。お蔭かげで雨が降つても枕木の

上を歩けるので、よこれずにすんだもんだ。その後、土を高く盛もったり、砂利を入れたり、鉄道から炭たんがらをもろろって敷いたりして、いつか先に敷いた枕木も土の下になつていたんじゃろうが、あのスリッパのお蔭で岩見沢のまちが大きくなつたんや。スリッパにお礼を言いわにや罰ばちがあたるがなあー。どれお参りに行くか

「おばあちゃん。どこへお参りに行くの？」

「スリッパじゃよ。長いこと歩かせてもろうたスリッパじゃよ」

おばあちゃんはヤッコロサとスリッパにお礼を言いに行きました。



## 《参考》

- ・ 一条、二条、中央通りなどの舗装工事には、路面を八十センチメートル程掘り下げ、土の入れ替えをしてから舗装されます。

その時に多くのスリッパが掘り出されましたが、昔は道路の中央にスリッパを敷並べてその上を歩くほど、道が悪かったそうです。

- ・ 札幌道路とは今の四条通り、夕張通りとは今の中央通り、農学校通りとは今の西五丁目通りのことをいいます。昔は、駅という駅通のことをいい、ステーションのことは停車場と呼びました。

## てっかん

# 鉄管道路物語

その頃は、そんなに道路がついていませんでした。札幌道路とか夕張道路のほか、上川新道、志文新道、基線道路などが主な道路でした。そんな時代に水道を引くことになったのです。

まちの人々は何度も話し合いをしました。しかし、水がなければ人々は暮らして行けません。どうしても水が欲しい。どんな苦勞をしても水が欲しいということで、たいへんな借金をして水道工事を始めることになりました。色々たくさん書類をつくって、お上にお願いに行くことになりましたが、そんなお金の用意がありません。

町長さんは、まちの人々からお金を借りて内務省にお願いに行くことになり、お金の用意してくれた人々に、町長さんは借用証書を出してお金を借りました。そんな苦勞のかがあって工事の許しがあり、水源池を市来知の上流の一の沢に決め大きなダムができました。配水池が今の労災病院の新しい小高い丘につくられました。

そして、一の沢の水源池から配水池までの間は鉄管で流してくることになったのです。太い長い鉄管を馬に引かせて一本ずつ並べていきました。鉄管を埋めるために土を掘る人夫、鉄管やそのほかの材料を運ぶ馬と馬夫、測量をする人たちなど、たくさんの人々が水道工事の現場に毎日毎日通うのですから、いつかそこに立派な道路ができました。川には橋がかかけられ、道の両側に側溝も掘られました。道路は水源池のほうにドンドン延びていきましました。道路が先に延びていくことは、それだけ工事が進んでいく証拠でした。そして、三年後に立派に工事が完成したのです。きれいな水が一の沢のダムから、みんなが苦勞して運んだ鉄管を通って配水池に流れ込みます。



水明公園

今度は配水池から市街に向けて配水管の中を流れていき、何百とある蛇口から勢いよくザーツとほとぼり出しました。そのきれいな水を手にうけて人々は涙を流して喜び合ったのです。

そして、水源池から配水池までの工事の時にできた道路は、正式な道路ではないが、札幌道路のように幹線道路としてあらためて使用することになりました。そしてこの道路の名前を水道管を埋める工事のためにできたので、鉄管道路と名付けることに決まりました。

今も、もとの浄水場から東の方に下りて行く道路がありますが、この道路の下を一の沢の水が鉄管の中を流れて来ているのです。

#### 《参考》

- ・ 岩見沢の水道は、明治十九年に当時の開拓使が地元で作った土管を使って一の沢の水を元町まで引く工事をしましたが、うまくいかなかったようです。この時使用した大小二種類の水道管が郷土資料室に展示してあります。
- ・ 今は桂沢ダムから水を引いていますが、その前は、明治三十九年に工事を起こし明治四十一年十月に竣功した水道を使っていました。
- ・ この工事は、二十万五千七百円でこの年の町の予算が全部で五万三千七百三円三十七銭ですから町予算の約三・八倍にあたる大変大きな工事でした。これを昭和五十年の予算をもとに計算してみると、工費は九百二億円を超えることとなります。

## 雪地蔵

その日は風が吹いていましたが、

雪は降っていませんでした。もうじき

春が来るので原野の雪はかたくなっております

道を歩いて行くより、畑の中を斜めに横切つて歩いてもあまりぬかることがありませんので、人々はみな近道を勝手に作つて歩いていました。仙吉も用が終わつて帰ることになりました。

冬の日には短いので午後三時を過ぎるともう日が暮れてきます。

仙吉は急いで近道を通つて、原野を斜めに横切つて行くことにしました。半分程来たところから急に雪が降ってきました。風も強くなり、とうとう吹雪になりました。次第に吹雪がひどくなり先も見えない程に荒れてきました。仙吉は真っ直ぐに歩いて行けば必ず自分の家の所に出ると信じて一生懸命に歩いて行きましたが、先が見えないものですから次第に曲がつて歩いていました。もうだいたい歩いたのですが、どうしても家の近くまで来たようには思われません。そのうちに誰か自分の前を歩いて行く人影が吹雪の中に薄ぼんやりと見えました。





「あの人も同じ方に行くが誰だろう。どうも見たような気がする後姿うしろすがただけけれど。はて誰だろう」と思い、足を速めてその人に追いつこうとしましたが仙吉が走るように急ぐとその人も急ぎます。

ゆっくり歩くとゆっくり行きます。

不思議に思いながら歩いているう

ちに、どうやら家の近くの地蔵さん

をお祀りまつしてあるそばの大きな木が

吹雪の中でゴウゴウとうなりを立て

てゆれ動いているのが見える所まで来ますと、今まで確たしかに前を歩い

ていた人の姿が見えません。まわりを見ても人影はありません。

「あれ。前に歩いていた人はどこへ行ったのだろう。この吹雪の中で倒たおれたのだろうか」と仙吉は心配して立ち止まり、右の方、左の方とすかして見ましたが見えます。「後ろの方だろうか」と振り返ふってよく見ましたがやはり見当たりません。不思議なこともあるものだと思

いながら真っ白になってやっと我が家わがに着きました。

家の者は大吹雪になったので、心配していましたが仙吉が帰って来たので皆みんなが安心しました。そして、仙吉が途中とちゆうで見た人の話を聞いて、

「それは仙吉の家で祀まつっている辻つじのお地蔵さんではないだろうか」ということになりました。それではと仙吉をはじめ家族が地蔵さんの所に行つてみますと、この吹雪の中を誰かが地蔵さんの所へ歩いて行つた跡あと



がついています。仙吉が祠ほこらの扉とびらを開けると、真っ白に雪だらけになつたお地蔵さんが笑わらっています。

「ああ。さっきの人だ。あの人がお地蔵さんだったのだ。お地蔵さんが道案内をしてくれたのだ。ありがたいことだ。お地蔵さんが道案内をして下さったので私は無事に帰つてきました」とあらためてお地蔵さんにお礼を言いました。それからは、このお地蔵さんを雪地蔵というようになったといひます。

## まわり道をした線路

「わたしたちが青年時代には、今の労災病院のあたりが競馬場けいばじょうでね。幾いく春しゅん別べつ線の汽車が競馬場のすぐそばを通るので、競馬の時はいつもより、ゆっくり、ゆっくりと東町の坂を上って行くので、客車まじの窓まじは乗客じやくやくの顔でいっぱいになったものだったね。それに線路が競馬場に沿つてまわっていたので、どうかすると一レース位は見物できたものだったよ。七十をとうに越したその老人は話を続けていった。

「そうだね。鉄道のできたのが明治十五年で、まだ岩見沢村ができる前であったから、一番都合つうごうの良い場所を選んで線路をつけたはずだった。だから、最初の線路は東の踏切ふみきりを渡ると右にカーブして、

萱野の先の砂利山で、一里二十五町(五キロメートル)を真っすぐに線路を敷いたものだった。むかし、競馬場のあった真中を通って今の労災病院の敷地の北側だったね。ところがだよ」

「どうしました」

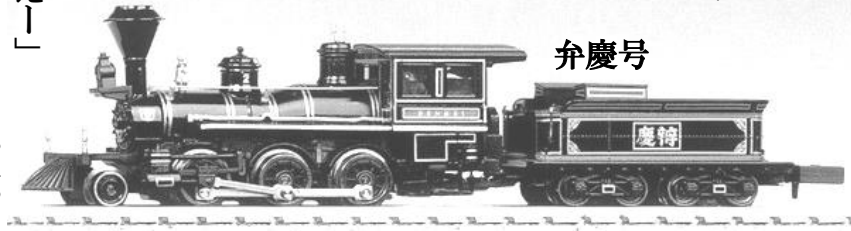
「そのなんだなあー。汽車の馬力が無いものだから、東の踏切を渡つてからの坂がどうしても上ることができない。そこで、競馬場から労災病院の高台にかけて十五尺(五メートル)以上も切り割つてみたが、義経号も弁慶号も機関車だけなら上れるのだが、貨車を引いては上り切れない。仕方がないので、あらためて測量をしておして、東の踏切を渡ると界道路の先まで勾配の少ない低い土地を選んでぐるりと遠回りをするようになったのだよ。お蔭で競馬場ができるよ、幾春別線のお客さんは列車の中から競馬が見られるようになったというわけさ」

「たいした坂でもないのに上れなかったのですかねえー」

「そうだー。その頃は十一月の末になると降雪期につき明春融雪まで運休するという張り札が出たものだよ」

「冬は汽車が通らなかつたのですか」

「そうだよ。一寸した坂が上れずにまわり道をしたり、雪が降ると



春まで休んだり、今の人には判らんことだろう」

老人は、キセルの雁首から吸いつけた火のついた刻み煙草を上手に手のひらに受けていました。

《参考》

- ・北海道で一番早く鉄道が敷かれたのは、明治十三年(一八八〇年)手宮、札幌間である。引き続き明治十五年(一八八二年)十一月十三日、幌内から手宮に右炭が輸送され、岩見沢駅、幌内駅が開設された。初代岩見沢駅長は、田隈広作といわれている。
- ・最初の岩見沢駅は、中央通りの旧踏切を渡った東側にあったが、明治二十五年(一八九二年)二月に、現在地に移転し、その後昭和八年(一九三三年)に三代目の駅舎が落成した。
- ・平成十二年(二〇〇〇年)十二月に岩見沢駅舎は火災により焼失し、平成二十一年(二〇〇九年)に現在の駅舎が完成して今日に至っている。
- ・明治二十三年(一八九〇年)十一月、駅立売業が許可され、弁当、すし、果物などが売られていた。初代営業者は、荒木三次郎といわれている。
- ・古い五万分の一の地図には、老人の言うとおりの競馬場があり、その中央に掘削のあとが記入されている。



# わたりどり ものがたり

その頃は、たくさんの渡り鳥が季節ごとに日本に渡ってきました。

秋になるとシベリヤから日本海を越えて北海道に渡ってきます。

中には北海道で一休みしてから、津軽海峡を越えて

南に行くのもありました。春になると、

今度は南から渡って来ると、今までの

雁や白鳥やつぐみなどが群をつくって

次々と北の国に帰って行くのでした。

毎年毎年、渡って来る鳥の群の中で、

いつもその群の先頭に飛ぶ鳥がいま

した。また途中で弱った仲間のた

めに力を貸す力もちの鳥もいます。

そして、怪我などをした鳥と共に、

途中で島などに下りて仲間から遅れて

いく鳥や、群から離れることのないように、たえずまわりを見回って

いる鳥など、渡り鳥には色々役割があるのでした。

群が海を渡る時には、夜昼休みなしに一気に強い風に乗って飛んで



行くので、夜などはお互いに鳴き声を聞きながら、群から離れないよ

うに渡って行くのでした。そうした中で、どうしてもついて行けない何

羽かの仲間がいたのです。そこで力のある道の知っている鳥が相談して、

とにかく近くの小島に下りて休んでから行くことになりました。

近くの小島といってもずいぶん遠く離れていたのが、大勢の仲間と別

れてから、やつのことでもその小島にたどりつきました。

そして、その小島で疲れを休めたのです。

この小島は、渡り鳥の道からはずれていたのが、何日たっても仲間の

鳥も、ほかの渡り鳥の姿も見ることができませんでした。

小鳥たちは元気になりましたが、今度は間違いなく仲間が飛んで

行った北の土地へ行けるだろうかと心配になりました。しかし、一緒

についてきた力のある鳥は、「大丈夫だ。安心して早く元気になるよ

うに」と、毎日、おいしいえさを捜してみんなを元気づけていました。

お陰で弱っていた鳥たちも、すっかり良くなり大丈夫、海を越える

までになりました。そこでいよいよ仲間たちがいる北の土地に飛び立

つことになりました。この島に連れてきてくれた大鳥が風の吹き出す

のを待って飛び立つので、それまでゆっくりと眠るようにいました。

若い鳥はいわれる通り藪の中でゆっくりと眠っていましたが、だんだ

んと風が強くと波の音がひどくなってきました。東の方に雲に隠れた月

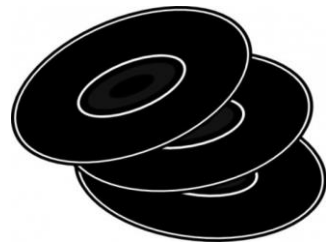
がぼんやりと昇ってきます。大鳥は一声高く鳴いてみんなを集めます

と、昇つてきた月を右に見ながら風に乗って空高く舞い上がり、みんなをつれて北の国へと消えて行きました。

鳥たちは、夜通し強い風に乗って広い海の上を飛んで目指す北の国に無事についたということでした。そして、この渡り鳥たちは、翌年の秋に利根別休養林に渡ってきて、一休みしてから南の国へ飛んで行きました。それからは、利根別休養林には多くの渡り鳥が集まるようになったといえます。

#### 《参考》

- ・ 利根別休養林のことを、昔は利根別原始林、利根別国有林と呼んで村人たちは大切にしていました。
- ・ 利根別休養林は、面積が約三六五ヘクタールで灌漑用貯水池大正池、金志の池などがあり、渡り鳥をはじめ数多くの小鳥などのために、鳥獣保護区域に指定されています。
- ・ 昭和四十七年から、自然保護休養林に指定され、橋や道がつけられ、指導標も建てられ市民のレクリエーションの森になっています。
- ・ この丘の周囲から、先住民族の使用した石器や土器が発見されています。
- ・ 今でも秋の月の良い晩に、「クイクイ、クイクイ」と鳴きながら、つぐみが渡つてゆく時の鳴き声を聞くことができます。



## 岩見沢の活動写真と

### 蓄音機ことばはじめ

岩見沢で初めて活動写真が映写されたのは明治三十五、六年頃のことである。時期は定か

でないが、たぶん夏から秋に移り変わるうとしていた頃であったかも知れない。場所は東小学校的校庭であった。映写会のある当日は、かなり前から宣伝されていたので人々は早々に仕事をすませ、夕食も明るいうちに食べ終えて、日暮れになるのを心楽しみに待ちこがれていた。日が暮れ始めた頃から東部落のみでなく、近隣の峰延、岡山、東川向などの地域からも家族同伴で見物に多数やってきた。

あまり広くもない校庭は見る見るうちに人でうずまってしまった。校庭の片隅にあるブランコの二本の柱の間に大きな白布が張っており、これが映写幕であった。あたりが夕やみにつつまれはじめると上映がはじまった。ガスランプの光源を使った映写機から映し出された画面は、幾つかのまんまるい手まり大のものが画面一ぱいに幾つもぐるぐる回るのみで、何が何やらわからないうちに第一巻は終わってし

まった。第二巻の内容は道端のさくに

つなされた馬が一頭いて、その前に

水の入ったかえば桶が置かれている。

馬が首をさげてかえば桶の中から

水を飲むようすが写し出された。

第三巻の内容は、裾の長く広がっ

たスカートを身につけ、頭には鳥の

羽根で飾った帽子をかぶった西洋美

人が映し出された。手にはハンカチ

を持って何回もそれを振り、最後に

投げるしぐさをするものであった。フィルムの始めと終わりがつないで

あるので、同じことが何回も何回も繰り返されるわけだが、観客は

動く画面をくい入るようにつめて驚き感心したものであった。

音声を伴わない白黒の画面であった。

蓄音機が初めて登場したのは、明治三十八年九月十五日の岩見沢

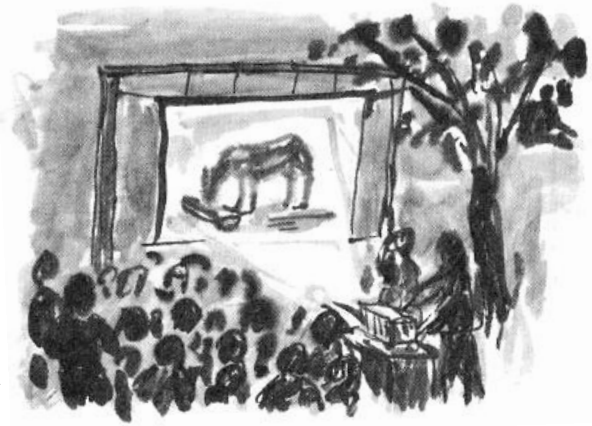
神社の祭日であった。中央通り二条交差点の四つ角にあった呉服店

前にテント張りの見せ物小屋がかかった。小屋の入口に立つ印半纏

を着た呼込み男の口上は、「お客さん、お客さん、この機械は話すば

かりではないんだよ。歌も歌うんだよ。ほらほら、東京の一流芸者が

歌っているのが聞こえるよ。三味線のバチさばきのほらほらあやなこと。



さあ、さあ聴いたり聴いたり」と大声で客引きをしている。

小屋の中に入ってみると、まん中に脚付きの台が一つ置かれていて、

それを表が黒で裏が赤い色をした布を二枚重ねて縫った布でおおつて

いて、その布の上に一台の小さな箱が置かれていた。これが蓄音機で、

この箱からたくさんのゴム管(聴音管)が出ていて、先端には骨製の差

し込みがついている。

これを耳にさしこむとゴム管を

通じて音が聞こえてくる仕組み

であった。箱の中の蓄音機がどん

な機械であったのか不詳であるが、

多分ロウ管を使ったものでなから

うかと思われる。一度に十人の人

が聞くことができ、一回の料金は大人五銭、子ども二銭であった。

物めずらしさから大勢の人が集まっていた盛況であった。



『空知のむかし話』空知の民話シリーズ第三集

昭和六十年三月(東郷土誌)より

# なけるようになった きつね

開拓が始まった頃はたくさん山のけものや鳥が住んでいました。

仙吉の家のまわりにもよく兎うさぎやきつねがやってきました。昼でも畑のまわりをかけて行くのが見えました。その年は春が遅くおそいつまでも雪が残っていました。けものたちは早く春が来るようにと、雪のまだ残っている山や野を駆けめぐっていました。

若いきつねはオシヤレおしやれでしたので、ほかのけものがまだ毛替わりけがもしないうちに、早々と汚れた

長い冬毛をぬいで短かな夏の毛にしたのです。

そして、「どうだ、きれい

だろう。もう春になったのだ。君

たちもそんなうす汚れた冬毛を

ぬいで、早くきれいな毛なみになった

らどうだい。ホラ、見てごらんよ。短くて

きれいだろう」と、コンコン、トントンと踊おどつて

見せました。ところがいつまでも雪が残るよう



な年でしたのでなかなか暖あたたかくなりません。毎日毎日少しずつ暖かくなってきましたけれど、朝晩はとくに冷え込みましたので、とうとう風邪かぜをひいてしまいました。きつねは大きな木のうろの中からだを小さくまるくして寝ねていましたが風邪は治りません。

そのうちに、春には珍しいほど新しい雪が積もりましたので、きつねはすっかり寝込んでしまいました。毎日毎日一生懸命養生いっしょうけんめいようじょうをしましたがとうとう声が出なくなりました。ゴホン、ゴホンと咳せきが出て、コン、コンとなこうとしますけれど声がかすれていつもの声になりません。きつねはすっかり弱よわってしまいました。

そんな時、長老のきつねが見舞みまいに来ました。

「なんということをするのだ。まだ寒いというのにオシヤレをして、夏毛なげなどに着替きかえるから風邪をひくのだ。咳が出て声が出ないというなら、昔から言い伝えのあるフキノトウを食べて寝ていることだ。なるべく小さなまるまるとしたフキノトウを食たべるとよいぞ。あまり心配をかけるものではないぞ」と言いって帰りました。

風邪をひいているきつねは、ただ小さくなって長老きつねの言葉を聞いていました。長老きつねが帰ると早速川辺の落葉などの下をかきわけて、小さなまるいフキノトウを探さがして食べました。とても苦にがい味あじがしましたが、長老きつねの言うとおりに咳がとれ、コン、コンとよくとおる声が出るようになったといいます。

## 《参考》

- ・フキノトウは、昔から咳どめの漢方薬として知られています。
- あくが強いので、採ったらすぐに灰か重曹を入れた湯でゆがいて半日ぐらい水にさらし、天ぷら、いためもの、ねり味噌などに使います。
- ・薬味にするときは、みじん切りにして使いますが、おつゆに入れますと春の香りと苦味があります。

## なべの沢物語

武吉さんは開拓使の測量班に勤めていました。まだ年が若かったのですが、人並以上に大きく力もあり年上の青年と同じように働きました。その上よく勉強もしましたから、多くの役人から大変可愛がられ、「武吉、武吉」と何事によらず用をいいつけられました。武吉はいやな顔をせず一生懸命働いたのです。二年、五年と経つうちに、武吉は小さな測量や工事などをまかされるようになりました。

何人かの班長になって測量に出かけることもありました。いつか武吉も立派な青年になりました。そして多くの人夫を引き連れて工事や測量を請け負う程になりました。

丁度その頃、武吉は幌向川の上流の方に測量と工事を請け負って、

たくさんの人夫を使って工事を始めました。測量をし設計をし、道路をつくり橋をかける大きな工事でした。人夫も二か所、三か所に分けて飯場をつくりました。

毎日毎日、武吉は工事現場から次の工事現場へと廻って監督をしました。中央の飯場に寝とまりしていましたが、その飯場に炊事や洗濯をしている千代という美しい働き者の娘がいました。

武吉はこの千代が好きでしたが、工事中でしたのでそれどころではありません。千代もまた立派な青年で男らしい武吉を好いていました。そんな事は口に出して言えませんでした。

工事は暑い夏をすぎ秋に入つて、もうじき完成する目途がつくようになり、開拓使の役人が何回か工事のでき具合を見にきました。

その度に甲斐がいく働いている千代を見ながら役人たちは武吉に「千代をお嫁さんにしてはどうだ」と言うのでした。

武吉はその都度笑っていました。もうあと何日かで工事が終わろうと思われるある日のことでした。千代はいつものように谷川に夕食用の薯を洗いに大きな鉄鍋を下げて行きました。一心に薯を洗っていると不意に後ろからギョツと抱きしめられたのです。

「アレー」と言う千代に、「俺だ。武吉だ」というなつかしい声が耳もとに聞こえます。「武吉さん」という千代に、「俺のところにお嫁にこい」と一言武吉が言うのと、つとはなれて行きました。

千代はしばらく武吉の言葉が耳からはなれませんでした。そして、武吉の姿がみえなくなると急に身体中があつくなりました。

千代は思いがけない武吉の言葉にすつかり嬉しくなりました。あまりの嬉しさに薯を洗うのも大きな鍋のこともすつかり忘れて、「私は武吉さんのお嫁になるの。武吉さんのお嫁になるの」と、ひとり言を言いながら飯場に戻つてゆきました。



気がついて千代が洗い場に戻つてみると、せつかく洗った薯はみんな流れてしまい鍋だけが残っていたといえます。それからこの沢を鍋の沢と呼ぶようになり、なべの沢は武吉と千代の縁むすびの谷川となりました。

#### 《参考》

・ 石油の沢地区（現在の清水町）の小沢に鍋の沢という地名が残っています。きつとこの沢が、武吉と千代の恋が実った谷川のあった所かもしれません。

## 土地守り神のはなし

明治二十八年、岩見沢の幌向に入植

した父は、何度かの水害にもめげず頑張ってきました。一番上の私も小学校入学を迎えることになり、小さな体で六キロもある悪い道を通わすことはかわいそうだ。何とかして学校の近い所に移り住みたいものだと考えてお



りました。たまたま親類の勧めで下志文の鉄橋近くに土地が見つかり、大正六年、春間近の三月に生活道具をまとめ移住しました。

開墾された土地には、まだ大きな切株があちこちに残っており、大切な農具をいためることがしばしばでした。父はまだ若かったので、鋸や斧で一株一株太い根を切り離し、馬で引き起こして畑を広げ種子をまくのが毎日の仕事でした。初夏となりエンバクや豆類は大きく育ち始め、秋の収穫が多いことを期待し、父母は除草に精を出しておりました。ある日、草取りの途中で母は夫の六三郎に「どうも目が悪くなつて草取りも不自由だ」と話しました。



その頃たくさんいる子どもたちの中で病気の者が絶えなかつたので、世間でよくいわれている、「方角が悪いのかな」と考えて暮らしておりました。

秋も間近なある夜、信仰深いおじ

(父の兄が来て、「六三郎や、お前の畑の中にご神木がなかつたか。それを損なっていないか」と問いただされ、そういえば最後まで畑の中に残された大木の切株を、今春ようやく根を切り、掘り上げたことを思い出しました。

おじは続けて、「そのご神木には明神さんが住んでおりなさるのだ。それを鋸や斧で傷つけてしまったのだ。これからは丁寧に祀らなければならぬ」と付け加えました。

父は翌朝、幌向川のやぶに掘り上げられたまま放置された大木の切株を、畑のすみに引き上げ小さな社を建て、オンコやスモモの木を数本植えて安置し、毎月十三日には欠かさず家族全員と隣のおじが集まって明神さんを土地の守り神としてお祭りしてきました。

父の一家が離農する昭和三十二年までお祭りは続けられ、母の眼病は進行せず失明することは免れ、私たち兄弟姉妹は健康で社会



に尽くすことができました。離農にあたって父は、土地を購入してくれた甥に、「この明神さんを土地の守り神として粗末にしないよう祀ってもらいたい」と伝言してこの土地を去りました。

その後、幌向川の治水工事が進められ、明神さんの社や切株は堤内地となり跡形もなくなっていました。

『空知のむかし話』空知の民話シリーズ第三集

昭和六十年三月(母の話)より

## まごべつ 孫別ものがたい

その昔、仙吉のとなりに同じ農家の新吉の家がありました。新吉の家では早く両親が亡くなりましたから、新吉も妹の千代も弟たちもみんなおばあさんに育てられました。

新吉も千代も弟たちも一生懸命働きましたが、まだまだ大人ほど働くことができません。それで春になって畠を耕す時は、仙吉の家で手伝ってやり、また、とり入れの時も仙吉らが手を貸してとり入れを手伝ってやりました。新吉は学校を卒業すると一心に農業に励み、



わからないことがあると、仙吉の家に来ていると教えてもらっていました。そのうちに新吉は二十歳の立派な青年になりました。

そして、その年の徴兵検査には甲種合格となつて兵隊になることになりました。新吉の家では兵隊に行くことは大変名誉なことだとおばあさんがお祝いをしましたが、新吉がいなくなつたあと、畠仕事をするのは大変なことだと仙吉らは言い合つていました。

秋のとり入れが終つて冬になり、十二月になるといよいよ新吉が入営するために出発することになりました。近所の人々はみんな見送りにきました。

「元気でお国のために働いてこいよ。あとの事は心配するな。みんなで手伝つてやるからなあ」と、元氣をつけて見送りました。

「それでは行つて参ります。あとの事はよろしくお願いします」と、新吉は新しい青年団服にゲートルを巻いて、みんなに別れのあいさつをしました。

「それじゃばあが峠まで見送つてやるぞい」と、おばあさんは新吉と一緒にお昼のおにぎりを背にせおつて行くことになりました。

村人たちは峠の下まで見送るとそれぞれ家に帰りましたが、おばあさんと新吉は曲がりくねつた雪の峠道に見えなくなりました。

そして、峠の一番上までおばあさんが一緒にいつたのです。

峠の高い所まで来ると、おばあさんは背にした風呂敷包みを新吉に

渡して、「さあ、これを持ってゆけや。お前が元氣にご奉公を務めて帰るまでは、ばあちゃんも丈夫でいるでなあ。その時までにはいい嫁ごをさがしておいてやるで。家の事は心配するでないぞ」と言いました。

新吉は、「ばあちやま達者でな。元氣でいてくれや。何かあつたら仙吉おじさんに相談してなあ。それじゃ。これでさようなら」と言つて峠を下りて行きました。おばあさんは新吉の姿が見えなくなるまで、

「新吉や元氣でなあ。新吉やー、元氣でなあー」と、声をかけていました。その声が聞こえる度に、新吉も「ばあちやまも達者でなあー。達者でなあー」と答えていました。それから、この峠をみんなが孫と別れた峠というので孫別というようになりました。

#### 《参考》

・ 昭和三十七年五月に全市の字名地番の改正がありました。その時まで、孫別という字名がありましたが、今は東山町、日の出町に分けられました。

・ 峠の一番高い所に、孫別小学校がありました。今は日の出小学校に併合しました。そのあとが孫別公園となっています。

そして、ハイキングコースの休み場ともなっています。

・ 孫別は、マゴペットというアイヌ語が語源といわれ、その意味は、向こう側に川のある所という意味だといわれています。

その向こう側の川は、市来知川のことをいいます。

## 吹雪号物語

馬の毛色には、栗毛くり、苜毛あし、鹿毛しか、黒鹿毛の外に、青毛あお（あお）があります。

昔から栗毛は美しいがひずめが弱く、青毛は黒くて脚あしやひずめが強い丈夫な馬が多いといわれていました。昔のことですから、どこかの家にも馬を飼かっているというものはありません。村人たちはみんな馬が欲ほしかったのですが、馬が少なすぎて、なかなか買うことができなかったのです。

開拓かいたくし使でも、農業をするのに馬がいなければ仕事ができないことがわかっていましたが、とりあえず二戸に一頭の割わりで馬を飼うようにというだけでした。

そんな時に仙吉の家では一頭の馬を飼っていました。

仙吉の家の馬は、みんなが丈夫で強いという青毛の馬でした。生まれた年の秋に仙吉の父が買ってきたものでした。名前は毛色と同じよう



に『あお』とつけられ、みんなに可愛がられて育てられましたから、家の人のいうことは良く判わかるりこうな馬に育ちました。

仙吉はよくあおと一緒いっしょに馬小屋うまごやで昼寝ひるねをしたものでした。

夏の暑い日には、あおを小川に連れてゆき、川の水をかけて体を洗ったり、寒い冬の日には、いつもよりたくさんしほの敷しきわらを入れたりむしろを着せてやったりしました。

何年かたつて、仙吉も立派な青年になりました。

あおはもう二十歳を越こえたので、昔のような元気がありません。

すっかり年をとった馬になりました。体のあちこちに人と同じようにしらがも生うえました。それでもあおはプラウやハローを引いて働はたらきました。街まで馬車を引いて行くこともありました。

ある冬の日のことでした。仙吉が街まで打ち合わせがあるので馬ば櫓そりで行くことになり、ついでに二、三俵びよ米や麦をつけて行くことになりました。街の精米所せいまいじょに、積たんできた米や麦の精米たのを頼たのんでから、仙吉は寄合よりあひに行くことになりましたが、なかなか話し合いがつきません。

とうとう夕方ゆふぐが過ぎ夜になりました。その頃から北風が吹き出すと次第に吹雪ふぶきになつてきました。時々前が見えなくなる程のひどい吹雪になりました。あおの背に仙吉がかけてくれたむしろは、真っ白になり、前に置かれた銅葉桶かいばおけの中にも雪が入り込みました。

その頃になつてやっと仙吉たちの相談も終わつたので、ひどい吹雪の

中を急いで帰ることになりました。街の中はまだ走ることができま  
したが、市街を出ると雪だまが飛んでくるようなひどきで、時々休ま  
なければなりません。あちこちに大きな雪の吹き溜りふだまができ、この吹  
き溜りを越すときは、雪の中を泳ぐおよようにして行くので、とても急い  
で歩けるような道ではありませんでした。

途中までは仙吉もそりを押したり引いたりしましたが、そのうちに  
仙吉はお腹なかが痛いたくなつて、とても手綱たづなを持つていられなくなり、あと  
はあおにまかせてそりの中でうずくまつてしまいました。

あおは、仙吉の様子の変つた  
のに気がついたので、一生懸命いっしょうけんめい  
に向かつてそりを引いて行きました。  
時にはどちらの方に行つたら  
良いか道が判らないようなこと  
もありましたが、あおはそのた  
びによく考えて、間違まちがわずに歩  
いて行きました。

仙吉の家では、吹雪がますます  
ひどくなり、仙吉がなかなか帰つ  
て来ないので、誰か迎むかえに行こう  
と相談しましたが、道も判らない



ような吹雪ですので、とても迎えに行くことができず、ただ心配はか  
りしていました。夜も八時を過ぎました。

みんなはどうしたものかと、あらためて相談をしていますと、ゴオー、  
ゴオーとなる吹雪の合間に、馬の鈴すずの音がかすかに聞こえてきます。

「あれはあおの鈴だ。それ、みんなで迎えに行こう」と、家中の者が  
「それ!」とばかり家を出ましたが、西も東も判らない程ほどの吹雪です。

あちこちに大きな吹き溜りふだまがあつて、一つ越えるのに大変なことで  
した。その中を、雪だらけになつたあおがそりを引いて家に向つて来る  
ではありませんか。家の人々は、「あおだ。あおだ。よう帰つてきた」と  
叫びながら、雪の中を泳ぐようにしてあおのそばに行き、「それ引け、  
やれ引け」と、みんなで家の前まで引いてきました。その中では、仙  
吉がまるくうずくまつて苦しくるそうにうなづいています。

「それ、家に入れろ」と、先ず仙吉を家に入れて介抱かいほうする者、あおの  
雪を払つて、「寒かつたろう。寒かつたろう。ご苦労だつた。さあ。お前  
も入れ」と、土間にたくさんたくさんのわらを敷いて、あおを家の中に入れて  
介抱かいほうしました。

それからは、仙吉があおのおかげで吹雪の中を命いのち拾ひろをしたので、  
あおを『吹雪号』と名前をかえて大事に大事に飼つたといひます。

# 鷺の沢物語

岩見沢は元町のあたりから

拓けてきました。そして、明治

十七年と十八年に二七七戸、

一〇〇三人の人々が入殖してきました。この入殖した人々は官営

移民といつて、開拓のために開拓使が入殖者をつのり、希望者の中か

ら決めたのでした。この人たちは、今の北条丁目の地区から市の中心

部、そして東町にと入殖したのです。その頃の岩見沢は、どこもこれも

大きな木が茂っていて、その間に背の高い熊笹がびっしりと生えていま

したから、入殖した人々は毎日毎日笹かりと木を切り倒すのが仕事

であったといえます。山には鹿も熊も住んでおり時々出てきたとい

いますから、大そう恐ろしい毎日だったそうです。しかし、林の中には

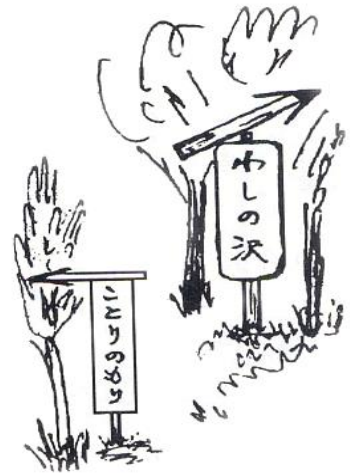
小鳥が楽しくさえずっていました。そのほかに鷹や鷺もたくさん住ん

でいたのです。そのうちにだんだん周りが拓けてくると次第次第に鳥

やけものの住む場所が少なくなり、熊などはずっと山奥の方にすみか

を変えてしまったのです。しかし、鷹や鷺や鷺などはお互いに自分の

領地を争い時々けんかをしました。するとときまって大きな鷺の方が



勝つのです。それで、鷹や鷺は今まで自分たちの住んでいた林や森を

みんな鷺にとられてしまいましたので、

今度は小鳥の住む林を自分たちの領分

にしてしまいました。今まで町外れの林

に住んでいた小鳥たちは、住む林も森も

なくなってしまうので、困った小鳥

たちは、「大きな力の強い鷺などはもつ

と奥山の方に住み、里に近い森には小さ

な小鳥が今までどおり住めるようにして

ください」と、森の神様にお願ひしました。森の神様は小鳥たちの願ひ

を聞き、「もつともなごことだ」と早速神様たちが集まって色々相談

をして、鳥たちの住む場所を決めることになりました。そして、里に

近いまちのまわりの林には鳩などより小さな鳥が住むこと、次の森に

は鷹や隼のような力のある強い鳥が住むこと、そして、鷺のような

大きな鳥は一番大きな森に住むことと決め、特別に鷺だけが住む森

と領分を作り、この森には他の鳥が住んではいけないと決めました。

神様から自分たちの住む場所を決められた鳥たちは、言い付けを

よく守りましたから、それからは平和な日が続いたといひます。今も

奈良町の方に鷺の沢という土地の呼び名が残っています。そして、この



## 板橋さま

ずい分昔のお話です。その頃までは志文の方に

行くには、今の神社の高台からスポーツセンター

の公園になっている低い所まで下りて行って、ポン

トネ川（東利根別川）の土橋を渡り、教育大学の高

台へ登って行き、明治池の横を通って行くのでした。

その頃は、この道が夕張まで通っていたことから、

夕張街道呼んでいました。ある日のことでした。村長さんをはじめ、

村の主だった人々が集まり、立派な学校を建てる相談をしました。

その頃から人々は、是非立派な学校で子どもたちを勉強させたい

と願っていたのです。みんなの願いがかなって学校を建てることになり

ました。人々は土地やお金を寄附し、そのうえ学校の工事を手伝い

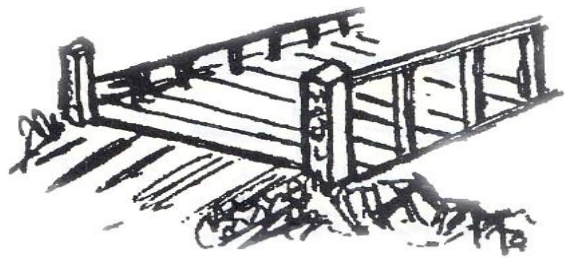
ました。そのお蔭で立派な学校ができました。人々はたいそう喜んで

お祝いをしました。しかし、学校だけ立派でも学校に通う道路が悪

くては困ります。また、道がないためずっと遠回りをする子どもがい

てはかわいそうだと今度は道路を新しく造ることにになりました。

村の人々は道路工事に精を出しました。そして、今の国道二三三四号



線を造ったのです。新しく志文まで通ずる道路ですので、志文新道と呼ばれました。この新道ができてたいそう便利になりました。トネベツ川には新しい立派な丸太土橋が架けられました。そして、農学校の中を通ってトネベツ川に流れるポイントネ川にも橋が架けられることになりました。人々は、この橋は是非自分たちだけの力で架けたいものだと相談しました。話が決まり、山から良い木を切り出し、厚い板を引き、太い丸太を何本も桁に使い、厚い板を並べ、かい折れ釘という太い釘を打ちつけ、丈夫なそれはそれは立派な板橋を造りました。

その頃の橋は、何本もの丸太を並べ、その上に土をかぶせた土橋しかありませんでしたから、板を敷いた橋はこだけでした。村人たちは、この橋に『板橋』と名前を付けました。あまりに立派にできたので、この橋を渡る時に板橋をよごさないようにと、下駄や草履を脱いで渡る人が多かったです。この板橋の上を何千人もの人、何千台もの馬車が通りました。靴のまま通る人は「土足ですみません」と断り、馬車が通る時は馬車追が、「それ板橋さまだ。大事に渡れよ」と馬に声をかけたといわれています。そのせいかどんな水害の時でも、この橋だけは流れることがなかったといえます。橋は幾度か架け換えられ、今では鉄筋コンクリートの立派な橋になりました。十トンも十五トンもある大型のトラックが通るようになりました。しかし、橋の名前は、昔付けられた通り今も板橋と呼ばれています。

# お坊さんどびわ橋

円空上人といわれる偉いお坊さんが、当時エゾ地と呼ばれる北海道に來られて仏教を広めました。

その時にたくさんのお坊さんを作って行かれました。その

頃であつたかも知れません。一人のお坊さんが石狩川から幌向川へとさかのぼり、今の幌向町のあたりからダルミ川の川岸を上流の方へ僅かな細い道をたどって歩いて行きました。あたりには大きな木や熊笹がしげり、太陽の光りもあまり届かないような所もありました。

ところどころに小屋があり、人々が僅かな畑を耕していました。

しかし、このあたりは毎年春秋に水害があつてよい作がとれないのです。

お坊さんはそのことを聞いて水害のない村にしようと願つて來たのでした。左に行くとダルミ川の本流です。

お坊さんはその本流をさけて右の方から流れてくる支流の方へ渡つて



国道12号線沿いのアカダモ



行きました。いつしか日が暮れて暗くなってきましたが、それでもお坊さんは歩いて行くのです。そして、すこし川幅の広くなった場所に來ると、そこに木の枝や笹で小さな小屋を造りました。それから食事をすませると一心にお経を唱えました。翌日もお経を唱えていました。それが終わると今度は持つてきた『びわ』を弾き、何かの物語をうたいました。いつか月が出て、あたりが明るくなってきました。

うたが終わるとお坊さんは弾いていたびわを川岸に埋めてしまいました。その上に小さなアカダモの木を植えると小屋を片付けて戻って行きました。その後、何十年か経ちました。お坊さんが植えたアカダモの木は高く大きな大木になり、上幌向からも幌向からもよく見える道しるべの木となりました。それから不思議なことには、大雨が降ると大木の根元に流れて來た水が溜り、ちょうどお坊さんが埋めたびわのような形の沼になり、いくらでも水が溜まるのです。そして雨が止むと今度は沼から流れ出して行きますので、この近くの水害はほとんどなくなりました。人々が幌向と上幌向を往復する時にここを通りますが、その橋にいつか『びわ橋』と名付けて、水害を除いてくれたお坊さんの恩を忘れないようにしました。いつか大きなアカダモの木は、道路を広げるために切り倒され、橋もいつか架け換えられました。ただ、近くのお年寄りが、「秋の月夜にこの橋のたもとに行くと、お坊さんの弾いたびわの音が聞こえる」と言っていました。

## 《追記》

- ・ ダルミ川は南四号で二股に分かれ、本流は現在の国道十二号線とJR函館線をまたいで御茶の水町の方から流れています。
- ・ お坊さんは本流をさけ、右の支流(中幌向川)を目指しています。その時植えたアカタモやびわ橋があったところは、国道十二号線沿いの六号、七号間、中幌向川の始点辺りであつただろうと言われています。

## 峠の水場

今の旧渡場きゅうわたしばが市街になつていた頃のお話です。岩見沢から旧渡場を通り栗沢村に入る人、あるいは上志文や湯の沢に行く人や馬車、もつと奥のミユルトや二見沢を通つて夕張に出る人、三笠の幌内炭山に行く人などが、



温泉の沢を通り玉泉園ぎょくせんえんの所を流れるポイントネ川にそつてさか上り、東山峠を越えて歩いて行つたものです。また、上志文の方から来た人たちは、反対にこの峠を越えて岩見沢の市街において来ました。

米、味噌、油、砂糖、酒、ランプに使う石油、ろうそく、塩や魚など

の食べもの、台所で使う雑貨類ざつかりい、下着や半てんなどの衣類いりいなど、すべて買ひ物は岩見沢の商店からでした。ですから、毎日たくさんの人や馬や馬車がこの東山の峠を越えて歩いて来たのです。この峠は岩見沢の市街と旧渡場の市街の丁度真中ちやうじゆちゆうでした。暑い夏など旅人はこの峠まで来るとお互いに一休みするのがならわしとなりました。

のどが乾くので、「水を飲みたいものだ」と思ひましたが家が一軒もありません。旅人はたいそう不自由をしていました。ある一人の旅人もやはりここで休みました。水を飲もうと持つてきた水筒すいとうを出すと栓せんが不十分だったので残念なことに水はすっかり流れて空からになつていました。旅人はどこかに水がないかと探さがしたところ、西側の谷に泉を見つけ、やつと水を飲むと市街に下りて行きました。そのとき旅人は、ここに水飲み場をつくれれば、多くの人や馬などがたいそう助かると考えて、帰りに桶おけを運んできました。このことを聞いたミユルトに行く馬車追ばしやおいが、「それでは峠まで運ぼう」と馬車に乗せてくれました。そして、泉のわきに水飲み場をつくりました。人々はこれを『峠の水場』といつてお礼をいながら大切に水を飲んだといわれています。



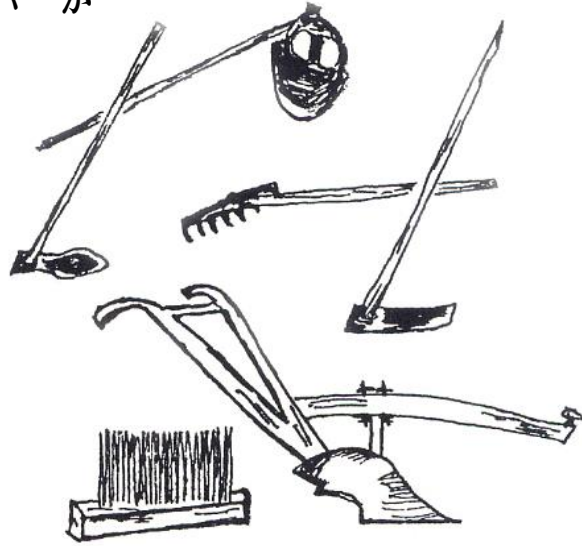


# ひよつとすゝめと爺さん

じい

仙吉の隣となりの新吉のお婆あさんから聞かされた話だがと、もうひげの白くなった新吉爺さんが、仙吉の孫たちまじに話していました。

それは岩見沢がまだまだすつかり開けていなかったころの話だといひます。土地の良い所を捜さがして開墾かいこんしわずかばかりの畑を耕たがやして、いもや



カボチャ、麦などを作っていたといひます。お天気がまわりが良い年は実入りも多くありましたが、そうでない年は翌年よくとしの秋までの食べるものにも困こまることが珍めづしくなく、そんな年には村の人々は落おちやわらび、また、うばゆりの根まで掘ほつて貯たくわえたといひことでした。

そんなある年、大変お天気がまわりの良い年にあたって、麦もたくさんとれ、その後まに蒔まいたそばもいつもの年よりたくさんとれるといひ

豊作の年があった時のことでした。

西の方で開墾していた家の爺さんが会う人ごとに、「いや今年ことしは豊作でええ年だった。わしのところではいつものにない程とれるようだ」と嬉うれしそうに話しかけ、「いや、本当に良かった。良かった。来年もまた、よい稔りになるよう一生懸命けんめいこつよ」と言い、「爺さんのところではどの位とれたかい」と聞くと、「そうさアーなあ。わしのところではひよつとするといつもの倍ばい近くはとれたかもしれん」

「爺さんのところではそんなにとれたとは、ええことだなあ」

「いや、五作ごさくどん、一寸ちよつとまつてくれよ。いつもの倍近くもとれたといひたが、どうかすると間違まちがいなく二倍近く、いや、ひよつとするともつととれたかなあ。いやいやまでよ。あそこできが良かったから、もしかすると、もつとあるかも知れん。ひよつとしたら二年分以上はとれたかも知れんぞ」と、爺さんの話にはきまつて、「ひよつとしたら」「ひよつとしたら」と言いながらだんだんと増ふえるのだそうです。

そして、そのたびにはじめ小さめに手を振ふっていたのが次第しだい次第に大きく振ふつて、「そうさなあ。ひよつとするとこの位はとれるだろう」と、大手を広げて言うので、いつからか『ひよつとすると爺さん』とみんなが呼よんでいました。

「その爺さんの名前は何というの」と聞くと、「さあア。何という人だったやら。村の人はみんな『ひよつとすると爺さん』と呼んでいて、

名前は聞いたことがないなあ」

「お爺さんも知らんのかい」

「そうさあーなあー。よう知らんが、ひよつとすると思い出すかも知れんぞ」と言いました。

「お爺さん、そのひよつとすると爺さんのまねをしてごらんよ」

「どれ、そいではひよつとすると爺さんのまねをしてみるかなあー。

こないだのう。ポントネ川に釣りに行ったら、この位の魚が釣れたぞ。

いやまでよ。上げた時には小さく見えたが、良く見ると六寸(十八

センチ)位はあったかな。いやいや。もつと大きかったかなあ。ひよつと

すると七寸(二十一センチ)か。いやまでよ。ひよつとすると八寸(二

十四センチ)から九寸(二十七センチ)いや、ひよつとすると一尺(三十

七センチ)はあったろうか。もう少し大きかったかなあ。そうじゃ。あ

れは鯉じゃったから間違いなく一尺二寸(四十七センチ)はあったろう」

「やあーい、お爺さん。そいでは初めの二倍にもなったよ」

「そうだ。お爺さん。ひよつとすると爺さんは、お爺さんのことでない

のっ」

「わしがひよつとすると爺さんか。うむ。ひよつとするとそうかも知

れんなあー。あつはつはつ」と新吉爺さんは大きな声で笑いました。

## お杉さん

お杉は顔だちも整い

背丈のある美しい娘に

なった。特に陰のない明

る性格で、こまめに

働くさまは近隣からほ

められ、また愛されていた。

十歳のときに母を亡くし、

父源蔵の手ひとつで育てられ十七歳、源蔵の一人娘であった。

いつの頃からか源蔵の家に近隣の若者たちが寄り合うようになって、

若衆宿のようなかたちとなっていた。

源蔵は若者たちの苦情や困りごとなど素直に聞き取って、あれこれ

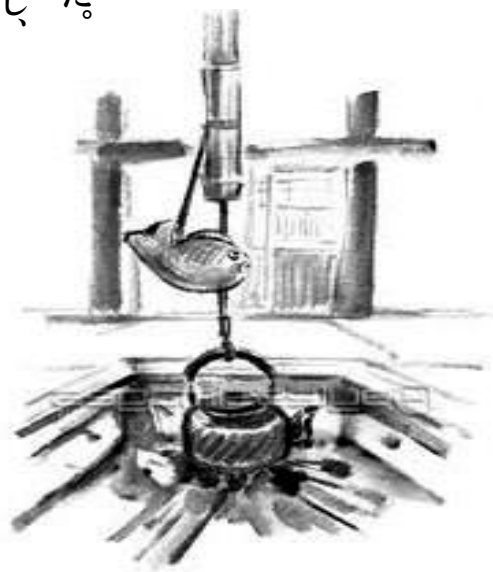
と自分の才覚で裁きをつけてやる雅量のある男であったので、雨の日

などは炬ばたが空くことがない程若者の出入りがあった。

源蔵は集まる若者たちに、二つの厳しいしつけを持っていた。

勝負ごと、野荒らしであった。いついかなる時でもこの二つのことには

目を放さない源蔵であった。だから、源蔵宅の出入りを若者の親たち



は認めていたのである。若者たちはいつも大きな切炬の板間に土足のまま腰をかけて、馬自慢、力自慢、食自慢とつねに大声をあけて口角泡を飛ばして語り合い、腕をまくりあげカゴブを競い、板場になつて腕相撲をとり、力あまつて足を伸ばし自在鍵の鍋をひっかけ、お杉の火ばしを喰らいゲラゲラと喜んでゐる者もいた。

しかし、年月の流れとともに若者の中には次第に変わつてくる者もいた。岩見沢の帰りとつて馬車追いの駄賃をさいてお杉に小衣をそつと贈る者もいたり、それとなく源蔵にきざみを置いてゆく者がいたり、単調に見えるこの若者宿もすこしずつ変わつてきていた。

面と向かつて源蔵にだれそれを婿にとはいうものはいなかつたが、源蔵はだれを婿にしようかと、いま考えの最中だとか噂話が広まつてゐることは事実であつた。源蔵も勿論知らない訳ではなかつた。

なんとかせねばと思ひながら忙しさにまぎれていたことも事実だし、第一みんない若者ばかりの中から、「これがお杉の婿よ、よろしく今迄どおりになあ」と、自分の口から言える若者をどうして選ぶのかと顔には出さないが心くだいていた。

畑の播付けを終えた五月の末、珍しく長雨が続いた。集まつていた若者たちに、「俺ら幌内太に行つてくるわ」と家を出た。源蔵の行き先は富八の処であつた。富八と源蔵は年も同じで若いころは流れ者、共に幌内炭山の下請の飯場でゴロゴロしていた時の友たちであつた。

バクチもすれば酒も好き、おまけにけんかとかくれば二人で買つても出る程の仲、そんな頃二人よりまだ上手の流れ者におだてられ、ひと夜素人を集めて、イカサマ博打を開帳して元も子もなく全部持ちさらわれてぼう然としてゐるところへ、幌内太の貸元といわれていた緒方佐太郎親分の若者に一件を知られ、「縄張り荒しは生かして置けねえ」と、川原に引きだされて二人共アバラ骨を折られた末、日本刀で片腕もと脅かされている最中、近くの「やの大工甚兵衛に救われ、それ以来まともな若者にかへつた二人であつた。富八は甚兵衛のもとで大工になり源蔵は作男から小作ではあつたが百姓になつた。

もう共に五十の坂を超えていたが富八は源蔵より人の世話好きでこの年になつても相撲好きで若者頭であつた。源蔵が訪ねていくと富八は裏の大工小屋で弟子に柱の床板にカンナをかけさせながら、あれこれと注意をあたえていた。源蔵を見ると、富八は「おう来たか」と言つて裏口から炬ばたに源蔵を伴つた。富八の家内のさくも留守で自在鍵の鉄びんだけが静かに息をついていた。

富八は「出がらし」といつて源蔵に茶をだし、「お前がいつ来るかやとさくと話していたぜ、お杉のことで来たべ、なあ……俺になあ……、お前の顔の立つつように俺ら考えとるからあ、そのかわりこのこと誰にもいふなや、けつして言うなや」と念をおした。

源蔵はお杉の婿えらびのことを、ここまで富八によまれていたのでは

致し方なかつた。源蔵は婿のム字もいふ事なく、世間ばなしをして「④の鍛冶屋に寄つて帰る」といつて富八の家を出た。

雨はふり続いてたが源蔵の気分ははれてた。夏がきて麦も焼き、亜麻もかわかし雨が来た。若者達は、ソウメンを持ち寄つて源蔵宅に集まつた。ひさ方ぶりの集まりであつた。お杉は土間の自在鍵に大鍋をつるして若者を叱りつけながら、ソウメンをゆであげさせ、自分はお間でイリコをたくさん使つてかけ汁を作つてやつた。

若者たちは井戸から水を汲みあげてソウメンを冷やし、大ザルに盛つて板間の中央にどんとだした。ザルを中心に若者が輪をつくり大きな手しよう皿やゴロ八茶わんにめいめいがソウメンを盛り、「いただきます」とも、「うまい」とも言わずわれ先にと食いはじめた。

あつかましい程の喰いぶりが続いた。お杉は火のほてりに当たつて土間の荒ムシロの上に横になつて休んだ。喰い終わった若者たちは、「あゝ食つた、うまかつたなや……」と言いながら後手に体をもたす者、さつと横になる者、満腹をもて余して話をする者もなく、しばらく広い板間はしんかんとしていた。義太郎は今年十七歳、お杉の家の裏手にある農家の二男坊、この若衆宿に顔は出していても、お杉の弟のような者で色恋にはほど遠い若者であつた。この義太郎が思ひだしたように静けさを破つて起き上がりながら、「あゝうまかつたでや」と腹をほんほん叩きながら妙なことを口走つた。

「こんなこともう二度とないべや」としゃべつたあと、はあつとした顔になつた。義太郎の向い側で横になつていた松造が起き上がつて、「おい義太郎、お前今何といつた」とこれを聞きとがめた。

義太郎は、「へへ、今に分かるべえ」と言いながら土間に降り、「俺ら用があるけえ」と、ソウリを突っかけて小走りに出て行つた。

義太郎のはだかの背に暑い陽が照りつけた。

お盆が過ぎ祭りの近づく頃、『相撲に勝てばお杉がもらえる』という話が村に広まつた。富八の打つたお杉の婿えらびの手段であつた。

この時代の村祭りの相撲は非常に盛んなものであつた。特に幌内炭山から後に大関となつた太刀光が本場所に入つたときでもあり、相撲に対する一般の関心は大変なもので、村々の強い若者には旦那衆が立派な化粧まわしを贈つて晴れの土俵入りをかざるといふ熱の入れようで、勸進元の旦那衆が座を連ね、賞品も白米が幾俵もかざられ、ひねりもどんどん投げられるという豪華なものであつたし、夜となれば毎年のように歌舞伎芝居が興行されて秋祭りを盛り上げて、後々にいたるまで出しものが伝え残されてたことでも、その盛況がうかがえるものであつた。わけてもこの秋の祭りの相撲五人抜きにお杉と白米がかかつてた。富八の考え抜いた婿えらびの手段、五人抜き、富八が「俺にまかせ」と源蔵に言い含めたことはこれであつた。

「お杉が欲しかったら五人抜きに勝て、相撲をとつて負けたらきれい

にあきらめてくれ」で、当時としては、あと腐れの残らない唯一つの婿えらび方法であったかも知れない。

富八はそれぞれの旦那衆にも話をつけての事であった。

九月五日は市来知神社のお祭りの日、お杉を張り合っていた多くの若者たちは、土俵上に青春をかけた。五人抜きひろうの披露ひろうを買って出た富八は、勧進元かんじんもとに挨拶あいさつして、一段と声を高くして、「只今ただいまより一農区より四農区までの青年相撲を勧進元のお声がかりでとり行う」と、たまりの若者たちをさ



し招いた。もの凄い声援せいえんがおくられ五人抜き相撲は白熱はくねつしていった。

結果は森蔵が勝者となった。真黒に日焼ひやけした森蔵は軽々と賞の白米を差し上げて土俵を幾回も廻って声援にこたへた。森蔵は相撲に強**いばかりでなく**、造材、馬追うまおい、野良仕事等、何をしても群ぐんを抜く若者で源蔵の若衆宿の一員でもあった。冬が過ぎ春になつてお杉は富八の世話で森蔵を婿に迎えた。まことに似合にあいの若夫婦であった。

ずっと後年、私の祖父そふの法事ほふしのおり、森蔵と同年配であった元蔵、要

吉の両伯父おじが珍めずらしく泊とまったとき、布団ふとんの上に座った二人が昔話をはじめたが、そのうち多少皮肉屋ひにくやの要吉伯父が、「元さんあの時相撲をとつただろう」と言うのと、元蔵伯父はヒゲ面ひげづらをなでながら、「とるにはとつたが、エヘヘ」と言つて笑つていた。この元蔵伯父は魚釣うしづりが好きで雨が續くと必ずといつてよい程に幾春別川を下つて来て家に寄つていた。

その度たびに私の母は、「兄さん釣れたかい」とたずねると、「うんにゃ釣れんかったわい。竿さおはお杉のうちに置いて来たわい」とヒゲ面をなでた。この頃、要吉伯父が偶然ぐうぜんというのか幌内太から住居を変えた。

それがお杉の家の筋向すじむきいの空地に家を建てて入つた。

本当に妙なめぐりあわせとしか考えられないが、当然伯父が私の家にひんぱんに出入りするようになったのが、この伯母がくる度毎たびごとに旦那の要吉がなんでも大事な用事といつてはお杉さんの家に出かけると、昔話を持ち出しては家の者を笑わせていた。

あれからもう四十五年あま余り、泣きたい程の思い出である。

『文学岩見沢』第十九号掲載

# 武士たちによる岩見沢の開拓



勸業課の鐘

岩見沢郷土科学館に保存展示

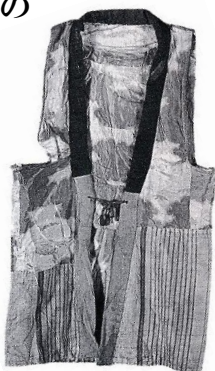
明治十六年、生活の困窮して  
いた失業武士たちを救済する  
ために移住士族取扱規則が公  
布された。これは失業している武  
士たちを北海道に移住させて、

農地を開墾させ農業によつて生計を安定させようとするものであつた。規則では、移住の旅費や農具、種子更に住宅建築費や生活物資を二年間にわたつて貸し与える制度で、一般の開拓移民にくらべると優遇された移民であつた。根室県では鳥取に、函館県では木古内に、札幌県では岩見沢に入植した。岩見沢への入植戸数は二七七戸で、このうち一三六戸は山口県、一〇五戸は鳥取県からの移住であつた。移住者たちは「明治天皇様のご命令でありがたいことだ」と感謝し喜んで渡道の決心をしたといわれている。移住者のほとんどは郷里での貧しい生活を捨て、安住の新天地を期待してやつてきた。故郷の港から汽船に乗り小樽に上陸し小樽からは幌内炭山に通じていた炭鉱鉄道に乗つて岩見沢の開拓地にやつてきた。岩見沢の駅はお客さんが

あるときだけ汽車が止まる駅で、小さな掘立小屋の駅舎が線路沿いに立っていた。道路は両側の溝から掘り上げた土を盛ったもので、雨が降ると泥のぬかるみになるようなものであつた。家は三間に五間の柱の板壁で六畳一間と台所と土間からなつていて、壁板は一重で天井はなく柱釘の先が屋根裏に見えた。家の周囲には今まで見たこともない大木がうっそうとして茂り、昼間でも薄暗くリスが木から木へと跳び移るのを見て怖がったものである。小樽に上陸したときは、郷里よりも立派な市街地に驚き、よい所へ来たものだと思つたものどかの間で、開拓の現地に来て、これはひどい所へ来たものだと思つた。抱えもある大木がうっそうと生い茂つていて、どうしてよいか判らぬままに家の

周囲の草を鎌で刈るだけであつた。

鋸で大木を伐りはじめたのはよいが、その



身支度は長袖の着物に博多の角帯を締め、よそ行きの表付きの下駄を履き、腰には煙草入れを差しこんだ姿は全く労働には不似合いかつこうであつた。女もまた長袖の着物を着て帯は大きなおたしこを結び、たすきがけの姿で道路工事や家作の人夫たちから嘲笑されたものである。人夫たちに教えられるままに、服装は筒袖、股引姿に改め、履物も草鞋、ツマゴ、脚絆をつけるようになった。

大木を切り倒し、枝を切つて積み上げ焼きはらい、少しずつ農地を拡げていった。鎌の不足から伝来の刀をヤスリで切つて草刈り道具にする者もいた。前年に伐採した積み木の下に、雪解けの頃に『赤ん坊』の死体が出てきてぞつとしたことがある。赤ん坊とは



市来知の囚人たちのことで、当時開拓者たちはこう呼んでいた。赤い獄衣を着ていたことによるのであろう。

市来知集治監から脱走してきて、やつとここまで逃げてきて凍え死んだものであろう。鳥取県土族の場合は、慣れぬ農作業の指導のため鳥取県が農業経験者を師範農家として二十戸ごとに一戸の割合でつけてくれたが、勝手の異なる北海道では内地での農業経験は何も役立たなかった。勸業課から派遣された原直五郎が監督で営農指導に当たった。この人は誠実で謹厳実直なお役人で、各戸ごとに一週間の作業計画表を提出させて雨が降っても風が吹いても開墾地を巡回して開墾を指導した。時には裏口からそつと家に入って不意に訪問し、怠けて仕事に出ていないときびしく叱られた。怠けると罰として生活物資の支給が減らされた。ある家を不意に訪れたところ、怠けて仕事を休んでいた主人はあわてて上がり口に手をつけて礼をするはずみに、誤つて手を突きはずしてトンボ返りをして土間に転落してし

まったことがある。さすがの原さんも

このときは苦笑して叱らなかつたという。

原さんはソバをまく時期になると大声

で「ソバまけ、ソバまけ」とふれ歩いたもの

である。凶作に強い作物で栄養も豊かな

食料であつたので、必ず栽培するように

指導された。子どもたちもいつか原さんの

こわいろをまねて、「ソバまけ、ソバまけ」と大声でどなりながら畑で

遊んだ。大人たちは原さんが巡回してくると「そら勸業がきたぞ」と

言つて気を引き締めて働いたものである。道端のイラクサに手足を

刺され、そのカユミに驚き、またブヨや

蛇、蚊に刺されて顔は黒ずんではれ、手

足も大根のようにはれたものである。

誰が考え出したのか知らぬが、ボロ布を纏に

ない、先に火をつけるといふつて、その煙の臭いでブヨや

蚊が寄つてこなかつたので、腰にぶら下げて畑仕事をしたものである。

毎日の生活行動は、勸業課のお役所の鐘を合図に行つた。給与米と

して玄米が給与された。手白でひいて食べたが米五合に麦一升五合

位混ぜた。でも米のご飯を食べられるのはよい方で、多くはソバ団子

や薯団子が常食であつた。二年間の政府の援助が打ち切られると、



開墾のつらさやきびしさに耐えられずに離農してゆく者が多く出てきた。岩見沢市の今の市街地のすべては、このようにしてはじめは農耕地であった。

『空知のむかし話』空知の民話シリーズ第三集

昭和六十年三月より

## 上幌向の開拓生活

上幌向入植の先駆者は、福島県人の依田伊之吉である。明治十九年に南一線東十一号附近に四万五千坪の土地の貸下げをうけて開墾をはじめた。明治二十年に札幌、旭川間の国道が開通し、交通が便利になるにつれて移住者も増えてきたが、おもに幾春別川の堤防地に居住した。

当時、上幌向の地はヤチダモ、アカダモ、ハンノキなどが密林をなし、林の中にはクマザサが繁茂し倒木がたくさん転がっていた。入植者は毎日、鋸や斧で巨木を伐り、枝木を落とし玉切りにして積み重ねて乾燥させ焼きすてた。ブヨや蚊、虻などにも多く悩まされた。

開拓の初期には伐採した樹木を焼く火柱があちこちに立って壮観



であった。時には、あたりの枯草に燃え移って入植者の掘立小屋に延焼しそうになり、一睡もせず消火と警戒に当たったという笑い話もある。笹の根や木の切株を除くのも一苦労で、斧でたち切り鋸で寸断し一畝一畝耕していった。

明治三十年代になると岩見沢の市街地

も開けてきて、木炭の需要も生じてきたので副業に炭焼きをした。一俵が八貫目で、駄鞍を馬の背に乗せ両方に二俵ずつ積み、市街地に売りに行つた。値段は一俵十銭位であった。この頃には、開墾地の用材は建築材、炭鉞の坑木、鉄道の枕木として売れるようになり岩見沢まで運搬して生活必需品と交換した。

熊がよく出没し開墾作業や運送の道中でブリキカンを押いて安全をはかったものである。

仕事着として一定のものはなく、丈の短かい木綿の筒袖の着物を着ていた。冬の戸外労働のときは、男は綿入れの着物を着てもんぺをはき、足には赤ゲットを巻いてつまこを履いた。頭にはネルを四角に切り、斜めに二つ折りしたもので頬かむりをした。手拭で頬かむりをするのはかなり後で、年寄り手拭で、若衆





は色物の頭中か風呂敷を二つ折りにしたもので類かむりするものが流行であった。履物は下駄、ワラジ、ソウリ、ひっかけツマゴなどで、冬は藁で作った深靴を履きカンジキを使用した。食物は粟、麦、とうもろこし、そばなどで、とうもろこしはひき割つて胚芽を除いて食べた。

そばは石臼でひいて粉にした。そば粉は水で練つても短かく切れてうまくだきなかった。それで粉を熱湯で練つて糊をつくり、その糊でこねるとうまくだきたのでこれが広まった。味噌は自家製であった。

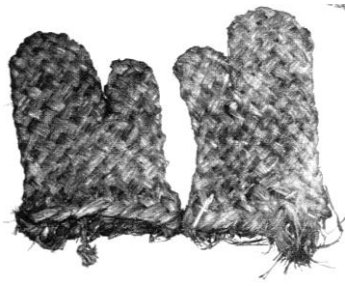
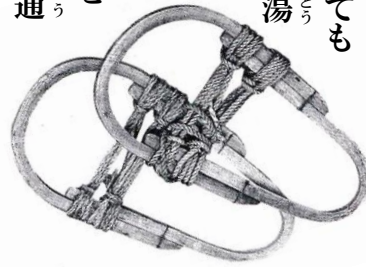
裸麦を精白して蒸し、床下にねかせてこうじをつくり、これを煮た大豆に混ぜて発酵させた。普通一度の仕込みで三年分位作った。米を食べるようになったのは、入植後三〜四年経てからで年間三〜五升位であった。米はお盆と正月に

食べるだけであった。ふだんの食事は小豆や麦や粟などの混食で、月二回位魚の塩蔵品を食べた。季節の山菜や野兎を捕獲して食べた。

住居は丸太を骨組みにした切妻型掘立小屋で、屋根も壁も茅葺であった。戸口には藁を垂らした。

土間には茅を敷きつめ、その上に藁を敷いた。

炉縁は丸太で囲い炉の中で薪を燃やした。冬の寒い時は大きな木の根を夜通し燃やし続けて暖をとった。住居に窓ガラスを使用するよ



うになるのは、明治三十九年頃からであった。室内には押し入れも戸棚などの家具もなく柳行李・夜具や汁器類は室の隅に積んでおいた。垂れ藁の戸口から吹き込む風で時々炉の焚火の火の粉が部屋中に舞い飛ぶが火事になることはなかった。熊が夜中に家をゆさぶったり、茅をむしつて食べたたりするので一晩中恐怖で眠れなかったこともある。灯火はブリキ製のカンテラ(小灯し)があったが、多くは炉の焚火の明かりで過ごした。夜外出するときには、炉の燃えさしを一本手にして歩いたが、これをふり火とよんでいた。

娯楽としては、お盆、お祭り、正月などに岩見沢の市街地まで鉄道線路を歩いて芝居を見に行くのが最大の楽しみであった。

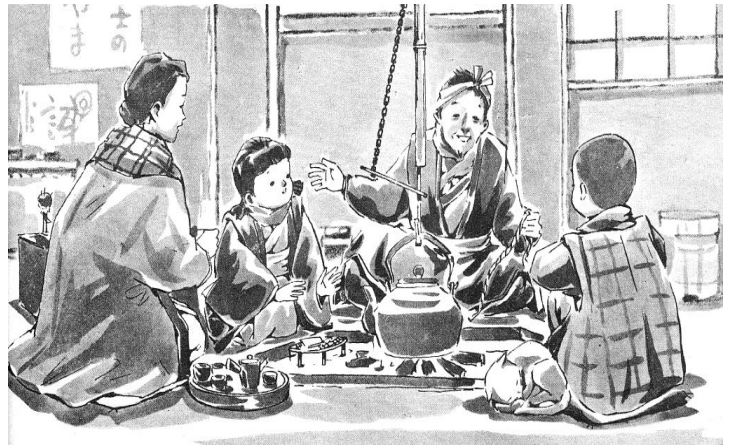


日露戦争後にはガスタンブの活動写真も登場してきた。雨の日や秋の収穫の終わった頃など、夜になると若衆が集まって、大根、人参、ごぼう、油揚げなどを煮て、夜食を共にし雑談して楽しんだ。また、ほうびぎと称して穴あき銭(寛永通寶)などを縄に通したものを引き当てるくじ引きなどをして楽しんだ。

明治三十一年の秋、幾春別川が氾濫して大洪水となり、開墾で伐採した木々が濁流に押し流されて、家屋に衝突するのではないかと心配された。家屋は冠水して一週間も水が引かず、家の中は五尺

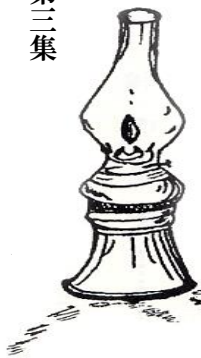
位(約一・五メートル丸太で床を上げ、その上に板を敷いて生活した。炊事は、天井から下がった自在鍵に吊った大鍋を囲炉裏代わりにして、その中で火を焚き煮炊きした。明治四十二年三月には電柱の電線をまたいで通る位の大雪が降り、上幌向駅に三日間も汽車が立ち往生したことがあった。その時の除雪人夫にかり出され、三昼夜も作業を続けたこともあった。

一日の出面賃は三十銭から四十銭であった。冬の農閑期の鉄道線路の除雪出面は農業外収入として貴重なもので、時には夜業があり、三割の割増賃金が支給された。明治時代中頃の物価は、燕麦一俵二円、米一俵三元、大豆一石六く七円、塩一升三銭、味噌一樽一元五十銭、タバコ三十匁で十五・六銭であった。



『空知のむかし話』空知の民話シリーズ第三集

昭和六十年三月(開基七十周年記念)上幌向郷土誌より



## おもいで点描

てんびよう

今日は部落の道修理の日。老いも若きもひと汗かいて車座になって汗をぬぐうと、座のなかの二、三の若者が立つて車座の人たちを尻目に下水に向って立ち小便をはじめた。この様を見た年かきの卯吉老が「ちえっー、わい等勿体ないことばかりするなあー」と大きな声で戒めた。その言葉を背に小便を終った若者が、元の座に帰りながらこちらも大きな声で、「卯吉さん、今なんて言った、わいら勿体ないとはそりや何の意味だい、教えてくれや」とけしきばった。

卯吉老はキセルの煙を静かに吐きながら、「ほおう気にさわったかい、つい勿体ないと言ったのはなあー、俺らの昔を思い出してな言っただわい。俺ら故国ではな、みんな暮らしが苦しくてな、百姓は大切な肥料が買えんでなあー、小便や糞のときは吾家に急いで帰って、肥溜に必ず用を足すように、親からやかましく言われていてなそれを守ったもんじゃ。おまえ等が今たれた小便は昔は大切な肥料だわい。下水にたれた小便は無駄なものだわい、それでいいなあー」

この卯吉老の言葉に若者も車座のみんなが卯吉老に注目し、シーンとなつた。しばらくして若者の一人秀さんが、「卯吉さん本当に内地

じゃ肥料買えんかったかい」と声を落してきいた。卯吉老は、「そうだわい、内地の水呑み百姓に今のよう<sup>かりんさん</sup>に過燐酸だ、硫酸だ、練粕だ、そんなもんが買える道理がないわい、肥料といえ<sup>しもこえ</sup>ば一にも二にも下肥、それに草を刈<sup>たいひ</sup>つて堆肥を造<sup>つく</sup>つてな、それを遠い田畑に天びん一本でかついだもんだ、つらかったわい、それを思うと今は極楽じゃわい、おまえ等なあ、肥樽<sup>うね</sup>かついで手じゃくで畝<sup>うね</sup>に肥かけながら走れる者が一人かいるかい、下肥に草の葉かぶせてこぼれんように遠い畑に行つて、汗かいたなあ」。卯吉老が感慨<sup>かんがい</sup>深げに一息ついたとき、なんでも一言ある若者の鶴さんが、「卯吉さん、俺以前からきいて置きたいと思つていたことがあるんだが、変なことだけ」と言つと卯吉老、「あゝいぜ、なんでも言え」。鶴さん男前の顔を引き緊<sup>し</sup>めて、「あのな、昔な、糞たれたときなんで尻<sup>しり</sup>ふいていた、なあ卯吉さん」と。

車座の中の女性が、「またいやらしいことを鶴さんが……」と。鶴さんなあおも、「どんな紙買つていたの」と。この鶴さんの間に卯吉老、ぐつと鶴さんをにらみながら怒<sup>おこ</sup>り声で、「この不足<sup>ばか</sup>(馬鹿者の意)めえー。昔、紙を買つて使うような百姓がいたかあー、よく考えてみる。

紙買えるようなものは、村長か街の分限者<sup>ぶんげん</sup>だわい。尻ふくとき、そりやお前えー、草の葉、木の葉、藁<sup>わら</sup>しべ(稲藁<sup>いなわら</sup>の芯)だー」。

この卯吉老の怒つたような返事に車座の一同さすがに真剣<sup>しんけん</sup>な顔になつてしばし。鶴さんは隣の誠<sup>まこと</sup>さんに小声で、「なあー。草の葉、木の葉は

わかるんだがなあー、藁<sup>わら</sup>しべでどうやってなあー」と。このとき私は藁<sup>わら</sup>しべの使い方より、紙が買えない百姓のことと、小学生の頃、新聞紙に書き方の下書を何べんも何べんもやった後、小言をもらいながら買つてもらつた高い半紙に清書したが幾枚書いても清書にならず、書き方の点がゼロで叱<sup>のたま</sup>られてばかりの小学生時代の出来事を思い出す。同時に卯吉老の「紙買えるかい」の言葉が身にしみた。しかしこの場では、草の葉、木の葉を使うことは、まゝみんなが経験<sup>けいけん</sup>のあつたこと。それは判<sup>は</sup>らんではなかつたが。藁<sup>わら</sup>しべ? たしかに冬になれば草の葉、木の葉は無いときである。しかし、卯吉老の「藁<sup>わら</sup>しべだの」返事は予想もしていなかつたことであつた。どうして使う、藁<sup>わら</sup>しべでお尻がきれいにするのかの疑問<sup>ぎもん</sup>。だれがその方法を聞くのかなあーと思つたとたんに、「さあ、また一汗<sup>ひとあせ</sup>かくか」と先輩<sup>せんぱい</sup>がスコップを立てて立ち上がった。なにかこの先輩<sup>せんぱい</sup>の一言に救<sup>すく</sup>われたような気がして、みんな仕事にかかつたが、あれは支那<sup>しな</sup>事変の始まる前だつたか。私はあのととき卯吉老と、あの言葉は今も忘れない。

